
十六次元のどこかで

こもも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十六次元のどこかで

【Nコード】

N6603M

【作者名】

こもも

【あらすじ】

交通事故で死んだはずが、異世界に転生？でも、性別・年齢が違っていてどうしたことよ？偶然平行世界に存在する『自分』に融合してしまった主人公が自己の存在を獲得していく物語……？

最後の日（前書き）

皆様の小説を読んでいるうちに、つい書き始めてしまいました。生まれて初めて書くものなので読み苦しいが多々あるかとは思いますが、温かい目で見守ってくださいませ。誤字脱字等ございましたら、ご報告お待ちしております。

最後の日

人生色々あれど、おもいつきし後悔することをしでかす事ってあるよね。

でさ、本当に不思議なんだけど、やばい事しでかす前にさ、いわゆる【フラグ】っていうの？立つんだよねー。ホント、頭の中に“ピコーン！！”って音するような感じがあつてさ、『あー、これしたら何かこんな悪いこと起こる予感・・・』っていうの。んじゃ、止めれば良いのに『まっ大丈夫か』って気にしないもんだから結局想像通りのことが起こってもう猛烈に反省するっての？いい加減いい年なんだからもう学習しろよなーて心の声が聞こえるんだけど、おんなじことを繰り返してまた後悔。

うん、さっきもさ音が聞こえたんだよ“ピコーン！！”ていう、しかも今までの人生の中で最大音量で。で、あたしどうなるか判ってたんだけど、ついやつちゃったんだよねー。そして想像どうりの結果・・・

大きく宙を舞ってます。テヘWW

いやー、もしかしたらさ勝てるかも知れないって考えちゃったわけよ。あたしさ高校生の時50CCバイクと正面から喧嘩して勝ったからさ（ちなみに自転車に乗ってました。正面衝突してバイクの人が吹っ飛んだよ。）万が一の勝機に賭けたんだけど、勝てるかもって考えること事態正気が無かったんだよね。

うん、あたしもさ普段は幾らなんでもこんな事はしないっていう

か考えもしないさ。ただ、ちょーつと今日まあその、ちょつとありまして・・・

いつも通りに会社に出勤して、仕事をして、そんで上司に怒られてそんな日常をこなしていつも通りに帰宅している途中、左腕が大きな衝撃とともにおもいきし後ろに引っ張られたんだ。あわてて腕を見てみると腕時計のリユーズが吹っ飛んで時計が壊れてた。

どうでもいい物ならキレてお仕舞いなんだけど、その時計はおじいちゃんの形見でさアンティーク物だから修理に出しても換えのパーツも無い。もう半泣き状態で渋谷の八チ公口付近で四つん這いで探し回ったよ。正直あんな所で通行の邪魔なんてものじゃないのに沢山の人が「どうかしましたか？」って声掛けてくれてさ・・・1時間ぐらい探し回って結局見つからなかったけれど、多分50人ぐらいの人が信号や待ち合わせの合間に一緒になって這いずり回ってくれたんだ。あたしよりも見つからないことに悔しそうにしてくれてさ・・・本当に感謝してもしきれないぐらいありがたかった！！

そんなわけで、悲しかったけれど、でもいつもとちょっと違うつてもいい日を締めくくろうとしていたんだけど・・・そうは問屋が卸さなかったんだなーこれが。

夕飯の買い物を終えてスーパーから出たところ、ちょっと変な動きをしている4WDが目に入った。ヨタヨタしてるっていうか、スビードの出し方が一定じゃない。

（あの車、大分様子おかしいな・・・通り過ぎるまでちょっと待つ

か)

なんてこと考えていたら、案の定急にアクセルを踏み込んだのかグンとスピードが上がったんだ。あたしは念のため安全圏に非難する為に車を一瞥して・・・思いつき悲鳴を上げた。

スピードを上げた車は急ハンドルを切るとそのままあたしの方、正確にはあたしの隣に居た女の子に向けて勢い良く突っ込んできた。遠くから名前を叫ぶ女の人の凄まじい悲鳴が聞こえてくる・・・この子のお母さんかな？

その時。聞こえたんだ“ピコーン！！”っていう音。

思わず、自分の考えたことにこんな状況に限らず笑っちゃったよね。車のスピード、あたしからの距離を見て女の子と反対方向に飛ばば、もしかしたら巻き込まれるだろうけど最低限命は助かる。でも、女の子は・・・

こういう状況に置かれると、一瞬がとても長く感じられるっていうけれど、『んなの冗談だろうが』って思ってたんだけど本当だったんだね。今日さ、助けてくれた沢山の人の顔が浮かんできたんだよ。

「もう家に帰るだけだから、時間は沢山あるから探せますよ」と言ってくれた女の子。

「困ったときはお互い様だよ」と言いながら最初から最後までずっと探してくれたおじさん。

「彼女との待ち合わせにまだ時間あるから全然大丈夫」と言ってくれた鼻ピアスしていた男の子。

他にも沢山の人の顔や言葉が浮かんでは消え、浮かんでは消えていった。

・・・あたしは、正直言つて人間が嫌いだ。もしあたしの手元に「人類のみ一瞬で殺傷できる生態兵器のスイッチ」なるものがあつたなら、全く躊躇いもなく押せる自信があるくらい嫌いだ。地球環境の為にとか言つてゐるならば人類の人口を半分にするのが一番効率がいいと公言して憚らないくらい人間が嫌いだ。

でもさ、さつき所謂【無償の善意】なるものを受けて、良くも悪くも単純なあたしはえらく感激してしまったのだ。

『この国に生まれてよかった』とか

『人間も・・・悪いもんじゃないな・・・』とかさ考えちゃったのよ。

そして、単純なあたしは更にらしくない事を考えちゃったわけだ。

『あたしにも出来ることをしたい』ってさ

逃げようとしていた脚に思いつきり力を入れて女の子の方に踏み込む。突っ込んでくる車を見て固まっている女の子を下から捌き上げるようにして悲鳴を上げている女の人の所に吹っ飛ばした。

女の子が派手に転がりながら女の人の足元に辿り着いたのを何と

か確認した瞬間、あたしの体は大きく宙を舞ってたのだ。

ボンネットからフロントガラスに叩きつけられた時、背骨と首から何かが碎ける鈍い音が伝わってきた。続いて大きな衝撃と共に地面に叩きつけられ、そこでまた身体の中から何かが潰れる音が響いてくる。

痛みは感じない。いや、痛みを感じないというのは拙いって何かに書いてあったような気がするんだけどねー。

何だろう、突然笑いたくなって口を開けたら声の代わりに血が溢れてきちゃったよ。

生まれてきて27年、ごくごく平凡で良くも悪くも退屈だったけど、最後の日がこんなんだとは。

・・・うん、悪くない一生だったな。特に今日が最後とは。・・・
いい一日だった。

目の前がゆつくりと暗くなってゆく。それにあわせて最後の力を振り絞ってあたしは瞼をとじていった。酷く、幸せな気持ちを抱えて。

0章 懐かしき日常

『忍ちゃーん、聞いて、きいて~~~~』

『うん??何、どうかしたの?また、知らないおじさんからパンツプレゼントされたの?』

『ちがうよーう、いくらあたしでもそんなことばかりじゃないんだからあ。あのね、昨日教えてもらったんだけど、アインシュタインの相対性理論ってあるでしょう。』

『・・・あんたからそんな単語が聞けるとは、お母さんうれしいわっ!!じゃなくって、それがどうしたの』

『うん、実はねえ、今一番最新の物理学だと、相対性理論で宇宙の成り立ちを計算していくと説明が付かなくなっちゃったんだって』

『・・・物理学・・・ねえ、熱あるの?寒気は?今日は大事を取って早退したらどう?』

『もーう、大丈夫だよお、ちゃんと話聞いてよねえ!』

『ごめん、ごめんね。あんまり今まで聞いたことない言葉ばかりだから。で、説明が付かないの?』

『うん。あたしも詳しいことはぜーんぶ忘れちゃったんだけど、相対性理論って質量があること?うーん重さなの?があることが前提なんでしょ?』

『いや、あたし文系だから全く解らん。ま、取り敢えず続けて続けて。』

『えつとね、つでね質量があると前提すると、矛盾がどうしてもでちやって説明がつかなくなっちゃうんだって。で、ノーベル賞を狙えちゃうぐらい偉い学者さんが1つの仮説を立ていて、学会に出るために列車に乗ったの。そしたら、同じ列車にやっぱりものすごく偉い学者さんも乗っててね、その疑問と自分の仮説を話したのよ。』

『うんうん、それから?』

『そしたら!! なんとそのものすごく偉い学者さんも同じ疑問と仮説を立てていたのよ!』

『……なんかご都合主義っぽいけど……で、仮説って何?』

『うん! それはね、質量の無いものの存在を認めるの。いわゆる魂の存在を肯定するの? そうすると矛盾が全てかいけーつ!』

『どんな矛盾があつたのかは……聞かない方がいい?』

『うん! 解からないから聞かないでえ』

『わかった……で、それでお仕舞い?』

『うん、まだ続きがあつてね、なんでも質量が無いものの存在を認めるためには十六次元の世界があるって事を想定しなくっちゃいけないんだって』

『また、段々荒唐無稽な話になってきましたが、四次元ポケットでさえ解からのにどんな世界なの？』

『あたしが解かると思っのかなあ？』

『すみません、馬鹿なことを言いました。』

『解かれれば宜しいっ！でね、十六次元っていうのはこの世界を取り巻いている大きな空間なんだって。その十六次元の中に1つ1つ膜に包まれたあたし達が居るような三次元空間が無数に存在していて、しかもその三次元空間はそれぞれ平行世界なの。だからある世界の中では女王様になった忍ちゃんも居るかもしれないけれど、事故死しちゃった忍ちゃんも居るかもしれないんだって。で、それぞれの次元の膜は隣接しているんだけど、質量のあるものは決してこの膜を越えることは出来ないの。それが出来るのは質量の無い存在、いわゆる魂だけなんだって。だから、心霊現象とかっていうのはこの膜を越えて自分の逢いたい人やまだ生きている自分自身に会いに来た為に起きる現象かもしれないんだってえ』

『何だかもう、なんでもありだねえ・・・』

『でね、この次元の膜ってね、何しろ十六次元内に存在しているものでしょう？どんな空間なのか全く想像もつかないからね、もしかしたら、忍ちゃんの隣にあるかもしれないのよー』

『・・・ほほーう、よく解かった。で、君にこんなアホな事を吹き込んでくれた昨日教えてくれた人ってどんな人なのかなあ？』

『うん、見てみてーえ！こんな可愛いブラくれた人なお。これに身につけた君を想像してるからってね言っ買ってくれたの。ほんとにいい人だよねえ』

『良いわけあるかー！！！！この馬鹿ー！！！！！』

『何で怒るの、もう、忍ちゃんったら妬いちゃって。大丈夫、あたしは忍ちゃん一筋だから安心して、ね！』

『その前に、あんた男だろうがー！！女物の下着を貰って喜ぶなと何回言わせればいいんじゃない？』

『ああーん、怒り震える忍ちゃんも素敵・・・』

『寄るな！！触るな！！胸を揉むなー！！！！』

『あつ忍ちゃん、待ってよう。あたしを置いて行かないでえ！』

1章：1 目覚め（前書き）

ユニーク&お気に入り登録してくださった方、本当に有難うございます！！

もう感激で悶えそうですのー！！！！これから、ちまちま頑張っていきますのー！！

1章 - 1 目覚め

そこは悲しみが雨のように降り注いでいた。

自分の力の無さと不甲斐なさとの弱さに絶望し、怨嗟の声を上げ呪詛を撒き散らす

胸を掻き毟り血を流し、救いを求めながらも救われるわけ無いとまた絶望する

例え救ってくれるものが居たとしても、救われたことに絶望し、天を地を呪い続ける

それが、ただ延々と繰り返されるだけ

・・・ああ・・・あそこに居るのは あたしだ

見るも醜悪な光景が広がる中、あたしはむしろ懐かしさの余りに1歩、また1歩と歩みを進めて行った。

この感情は良く知っている。むしろ今もあたしの奥底に息づいている。

でもね、それ以外も教えてもらったから。もっと柔らかくて、暖かいものも知っているから。

まだ、暖かいものは小さいけれども、でもこんなにもあたしの中に息づいている。

あたしは、天に向かって血を吐くような叫びを上げ続けるあたしにゆっくりと手を伸ばした。

この手が届くように

伝わるように

淋しくないように

人が 世界が 自分が 少しは好きになれるように 祈りながら

水面から引き揚げられるように意識が浮上してくるのと共に、徐々に聴覚が周りの音を拾い始めてきた。

金属同士が激しくぶつかり合う音、男女の大きな悲鳴、耳障りな怒声と全身を包む大きな振動。

余りにも今まで聞いた事が無い音の羅列に違和感を感じて目を開けたら、目の前に広がるありえない光景に我が目を疑った。恐怖の余りに悲鳴を上げようとして口を開いた途端に自分が全く呼吸をしていないことに今更ながら気づいて、息を吸おうとした瞬間、空気の変わりにドロツとした生暖かい鉄錆のようなものが喉いっぱいになり反射的に僅かに残っていた肺の空気と一緒におもいつきし吐き出していた。

「グガエ！・・・ガハ ゴフツゴホ・・・ゲホ！！」

「良かった・・・良かった！！気がついたんだね。大丈夫かい？！しっかりおしよ！」

涙で顔をクシャクシャにしたおばさんが、あたしの顔を見るなり一瞬ホツとしたような笑顔を見せて、あたしの胸の上にかざしていた両手を外し顔や口の周りについている血を震える手で拭い始めた。

「ちょっと待ってて。もうちょっとしたら動けるくらい再生が終わるから」

そう言つてまたあたしの胸の上に手を翳す作業を開始する。と、何やらほんのりとその箇所が暖かくなり先程から胸部を中心に走っていた激しい痛みが薄れてきているのを感じて、強張っていた全身から力を抜きながらずっと感じていた目の前の大きな違和感について聞いてみることにした。

「・・・此処は・・・？何がどうなってるの・・・？」

先程交通事故にあつたことは覚えていられるけれど、それと今の状況は余りに違いすぎている。そして何よりこのおばさんの着ている洋服が確か18世紀後半ぐらいのヨーロッパでよく庶民が着ていたスタイルに良く似ていた。おばさんが言っていた【再生】という言葉と行動に然り、少し離れたところで今現在行われている残虐行為に然り、確認しなくてはならないことが沢山ある。

「あんた、さつきまで自分がしたこと覚えていないのかい？」

おばさんは一瞬信じられないものを見たかのようにあたしを見た後、何かを堪えるように目を細め続きを口にした。

「あんたは、さつき殺されかけたんだよ。あたし達が乗っていた乗合馬車が盗賊に襲われてね。あんたは真っ先に飛び出して何人が殺してくれたけれど女の子を人質に捕られたんだ・・・。それで身動き取れなくなつたところを前から斬られちまつたのさ。でも、この傷でよくあんた生きていたね・・・」

そう淡々と口にするおばさんを尻目にあたしは何気なく告げられた信じられない内容に文字通り思考が停止状態に追いやられてしま

った。

ちょっと待て、この人今あたしが人を殺したって言ったよな？殺したって言ったよな！あたしは殺してなんかいない！そんな記憶は持っていないしそれは絶対断言できる。じゃあ、この人は何でこんなこといったんだ？いや、それより、一番の違和感はこの声だ。自分自身で認識している声は身体で感じている分本来より低く聞こえるが、それにしてもこれは余りにも低すぎる。・・・そう、この声はまるで

そこまで考えたところで、おばさんの後ろに変な光が差し込むのが見えた。ついで、唇を大きく歪ませ血走った目をしている男が今まさに大きく剣を振り下ろそうとしている姿がスローモーションのように視界に入る。

その途端あたしの体は脊髄反射のように反応していた。おばさんの身体を横に転がした瞬間、全身をバネのように撓らせ起き上がったと同時に男に向かって間合いを詰める。驚愕の表情を浮かべている男の手首に手刀を叩き込み剣を奪い取るとがら空きになった胴体部に短い呼氣と共に掌底を叩き込んだ。その途端男の身体は3メートルほど後方に吹っ飛び、どんもりうって転がった後ピクリとも動かなくなった。

この間僅か1秒足らず。あたしは自分の仕出かした事が理解できず驚愕に目を見開き、おばさんは目の前で起きた光景にあぐりと大きく口を開いた。そして、その余りのことに誰もが戦闘を止めてこちらをまじまじと注目している。と、漸く正気に返った盗賊のリーダーらしき男が怒りで顔を真っ赤にし、怒鳴りながらあたしに襲い掛かってきた。

「何しやがった、このクソ野郎おおお!!!死にぞこないの餓鬼が————!!!」

野郎・・・そう、野郎なの。一番の違和感はそれだったの。節張った掌、細身だが無駄なく付いた伸びやかな筋肉、大きく目線の上がつた視界。重量ある剣を悠々持つことの出来る力。そして、青年よりは高く少年よりは低い声。

100人に質問しても全員が迷うことなく“男”と言う身体にあたりはなっていた。

1章 - 2

男 男性 MEN MALE 染色体XY 解剖学的な意

味での男性は、多くの場合性染色体としてXとYを1つずつ持つ男性とは女性と対比される人間の性別のこと。一般には生物学的なオスと同義である。・・・さすがwikipedia!!! マンサー!!! ハラショー!!! 良く理解したぜ!!!!

はつきり言つてこの時あたしは今までの中で最大級の混乱の局地に居た。確かに殺人者といわれたときも混乱したが、この時はそれの比ではなかったのだ。あえていうならば、普通に生きていても殺人者になる可能性もある訳だ。例えばあたしの死因である交通事故。もしこれが加害者側だったらあたしは立派な殺人者だ。そしてあたしは無論博愛主義者ではなく、もし大切な人が殺されそうな場面に遭遇した場合、あたしは躊躇うことなく相手を殺っちまうだろうしね。その後で、社会的及び自分的にどう責任を取るか、償いをするか等倫理的な話は全部放り投げてしまつての話なんだけ。冷たい良い方だけど、こういう原因であれ行つた行動の結果としてその事が存在するのだ。

しかし性別の問題はそれとは違い、自分では選べない次元で存在している。だが自己や性格の形成においても性別の違いは想像以上に大きく関わってくる。それゆえ、とても繊細で奥深く、他人が易々と触れてはいけないものなのだ。なにしろ己の存在理由を根源的に問われる内容なのだから。

・・・って、いやいやいや!こんなこと考えていても意味ないから!!! つか、何で死んだ筈が生きていて且つ身体が違つちゃつての!!!!!! よし。ちよつとさつきおもしろいし咳き込んだ

やったから喉が噎れて低い声になったかもしれない。ちょっと確認してみるか。

あたしは振り下ろされる刃を交わしながら、恐る恐る片胸に手を当ててみた。

うん、ついてなーいww
って、ノオオオオオオオオオオ！！！！！！！！

あああ、あたしの手には思わず縋りつきたくなるような逞しい、でも厚過ぎない胸筋の感触が・・・

一応さ、あたしにも在った訳よ。平均的日本人女性よりちょっと豊かな（はずの）バストがさ！！それが無い！！・・・いや！！いや！！まだ希望は捨てるな！！もしかしたらこの身体はボディビルとかしていて大分マツチョになっちゃったのかもしれない！！かくなる確認場所は・・・

そして、あたしはプルプル震える手を伸ばして、禁断の場所ー！股間にそつと手を伸ばした。

今まで無かったものがありましたwwあはははははは・・・

orz

どうしよう・・・もう否定のしようもない・・・

絶望でホント地の果てまで落ち込んでいるのを尻目に、こちらの心情に全構ってくれないKYな盗賊の皆様が、余りにも攻撃が当たらないのでキレたのか怒声を上げて一斉に突っ込んできた。

「いい加減死にさせ、ゴルアアアアアアア！！！！！！！！」

「五月蠅い！！！！こっちは大事な考え事してんだから黙ってる！！！！」

振り向きざま、振り下ろされた剣を弾き顔面に裏拳をかまし、よろけた所を廻し蹴りで吹っ飛ばす。続いて飛んできた矢を叩き落とすと四肢に力を込めて勢い良く飛んで距離を詰め、顎に熊手の中て昏倒させた。次いで、後ろから切りかかってきた刀を体捌きでかわし上段へ後ろ回し蹴りとその勢いを利用し身体を回転させて側頭部へ蹴りを放ち地面へ沈める。素早く周囲を見渡すと、後残っているのは2人のみ。

落ち着いてから今回の状況を確認してみると、良く躊躇わず攻撃できたと思う。あたしは高校生の時ちよつとだけ格闘技を習っていたけれど、所詮学生のお遊び的なものでしかなかった。勿論実戦経験なんてあるわけないし。ただ、本当に不思議だけれどこのときあたしには全ての行動がごく自然に、呼吸をするかのごとく出来ていた。いや、多分この身体はこういった荒事に慣れているのだろう。その身体に染み付いた経験があたしに余裕と周りを観察する目を与えていた。

だから、この後盗賊の一人が不思議な行動をとるのとても冷静な目で視ることが出来た。

盗賊は右手を地面に平行に掲げ、何かを握りこみその拳をあたしの方に向けた。不可視の力場が完成しそこに存在していたエネルギーは火炎弾となって襲い掛かってくる。

目の前に迫るそれに対しあたしは剣を上段に構えると勢い良く呼氣と共に振りかざした。途端に衝撃波が発生し、それは火炎弾を消滅しても尚勢い止まらず、軽く地面を抉りながら攻撃延長線上に居た盗賊を巻き込んで彼方へ飛んでいってしまった。

さて、最後の一人になった盗賊のボスは見えているこっちが可哀想になるぐらい恐慌状態に陥っていた。なんか、さっきの火炎弾が奥の手っぽかったしね。

「どうする？このまま大人しく捕まるなら命は助けてやるけど？」
一応マナーとして降伏勧告してやる。ま、その次の動きなんて想像つくけど。

盗賊のボスは血走った目で喚きながら周りを見て、案の定奴はおばさんと保護され震えている女の子に目をつけ、口の端に勝ち誇ったような醜い晒いを浮かべ二人に掴みかかっていった。

想像通りのベタな展開、ありがとうございます。まあね、二人からの距離は盗賊は4mぐらいであたしは25mぐらい離れているからそう考えるのも判りますけどね。この身体、動いていて気が付いたんだけど、筋力半端ないのよね。

腰を落とし体重を前方に傾ける。思いっきり力を溜め込んで前に開放するように跳んだ。

ドゴン！！！！！！

鈍い音を立て、足元にクレーターを造って跳躍するとあたしの身体はそのまま一直線に盗賊まで到達。そのまま飛び膝蹴りに移行する。首だと死んじゃうので軌道を逸らし肩にヒット！

「ぎゃっ！！！！」

盗賊は短い悲鳴を上げてあたしの勢いそのままに吹っ飛ばされて砂煙を上げながら転がっていった。

「・・・よし！全員戦闘不能。おばさん、あとえ〜と、君大丈夫？怪我なかった？」

先程まで死に掛けていたあたしの言葉に、おばさんは呆然としながら首を縦にカクカク動かし、女の子は目に涙を一杯浮かべながら

あたしをジッと観ていた。そして、そんな会話を聞いていた乗合馬車の乗客の人達が皆力尽きたようにその場に座り込んでいったのだった。

1章・3 旅は道連れ？（前書き）

今回、いわゆる15禁に相当するシーンがあります。不快に思われる方もいらっしゃるかと思いますので、苦手な方はスルーして下さいませ。

1章 - 3 旅は道連れ？

性別が変わって初めて友達が出来ました。でも、彼女は

「私はあなたの忠実なる僕しもべです。何なりとお申し付けください、御主人様」

と言つて聞きません。どうやってこれから接していったら良いでしょうか。お願いですから誰か教えてください。

「ケガは無い？大丈夫？」

あたしは傷の有無を確認する為そこで初めて声を掛けた女の子の
だが、つい我を忘れてまじまじと観察し、そのあまりにも超弩級の可愛らしさに目を剥いた。

憂いを帯びた輝く金色の瞳には零れ落ちそうな泪を湛え、それを縁取っている長い睫毛が泪でキラキラと光を帯び幻想的な雰囲気を出しており、また涙の痕が残っている白く円やかな頬は、本来なら薔薇色に染まつているであろうが先程与えられた恐怖の為か色を失つてその肌の白さを深めていたのだが、それが逆に幼い少女に年齢に不似合いなほどの色気を加味していた。そしてプツクリとした形の良く艶々としたピンク色の唇はまるで何かを待ち望むかのごとく薄っすらと開かれていた。だが、何よりも腰まである彼女を彩る燃えるように美しく波打つ紅い髪が、それだけなら人形の如くとされそうな彼女に生命力という名の何よりも大切な輝きを添えていた。

『すげー、此処まで来ると一種の芸術品だね・・・』

あたしは彼女から目を放せないまま、ふと傾国の美女が存在するのなら、こんな子になるのかもしれないと想像する。そりゃ、こん

な子が目の前に居たら男だったら誰だって思わず奮いつきたくなるわな。女のあたしでも見ていると、何故だろう、こんなに胸がドキドキする・・・ってナ○シ力か?!?!?!

でも、自分でポケ突っ込みしないと正気を保ってられないぐらいこの子の魅力はハンパない。まさに恐るべし!!少女!!

そうか、見ているから拙いのか。んじゃあ、ざっと見たところ怪我はないようだしとおばさんの身体の確認をし、お互いの無事を祝福しあう。うん、おばさんとの会話はホツとする。

・・・それにしても、もし俺が将来結婚するならば、こういった安らげるような包容力のある女性（ひつ）がいいよな・・・

・・・ん?・・・あれ??なんかあたし今へんなこと考えていなかった?まつ、いいか。

一瞬頭に浮かんだ変なことを振り払うように二人背を向け他の怪我人の様子を見るために歩き始めると、後ろから小さく、本当に小さく声が聞こえた。

思わず振り返り二人を見ると声は女の子から発せられたもので、彼女はあたしをじっと睨み付けるように見つめ、やがて小さく喉を鳴らすと鈴を転がしたような声を上げつつ、こんな華奢な身体にどんだけ力があったんだという勢いでもいっきし鳩尾にタックルをかましてきた。

「アレクシスさまー!!!!!!よくご無事でー!!!!!!」
「グホオ!!!」

彼女はタックルをかますのと同時に力いっぱい鳩尾を突き上げそのままあたしを後ろに引き倒した。そして素早くあたしの腰の上に乗っかりマウントを取って固定する。・・・この子、ラグビー経験

者か？いや、もしかして総合格闘技経験者か？

可憐な外見しているからといって中身も可憐とは限らないということは女やってる時に十分に知っていた筈なのにと、改めて思い知らされる万国共通の事実にあたしはそつと目頭を熱くした。だってさ、絶世の美少女がよ、（多分）年若いお兄ちゃんの上に馬乗りになって、拳句に

「アレク様の怪我はあたしの所為です！だからあたしが責任を持つて必ず直しますから！」

と言ってくれるのは大変うれしいけれど、やってる事は人の上半身裸に剥いてますからね。どんな羞恥プレイですか。しかもどんな原理かは知らないけれど、おばさんは服の上からさつき【再生】って行為をしたってことは服を脱ぐ必要性ゼロってことじゃないかなあ？

先程のタツクルの影響でどうやら少し傷口開いたらしく、軽い貧血状態になりながら彼女の気が済むまで【再生】してもらってから後で事情聞いてみようと思うと強く、強く心に決めたのだった。

結局、今日は野宿になりました。本当は誰もがこんな惨劇のあった場所から一刻も早く離れたいというのが本音なんだけど、あたしの他にも数人盗賊との戦闘で怪我をしてしまった人が居たため大事を取るようになったのだ。

で、あたしは絶世の美少女に手を引かれ、森の奥に連れて行かれています。なんかもう、他の皆さんの視線の痛いこと痛いこと・・・大丈夫です。あたし、身体は男でも中身は女だし（・・・・・・orz）彼女は絶世の美女でもどう見ても小学生3〜4年生ぐらいにしか見えません。あたしは子供を襲う趣味はないので絶対に間違い起

きようがないですよ！

皆の居る場所から森へ80mほど奥に入り、誰の気配もしないのを確認してから彼女は歩みを止めてこちらに向き合うつと、あたしの奥底を見通そうとするようにじつと目線を合わせ、ポツリと「これからする無礼をお許しください」と言うつと、おもむろに足払いをかけてきた。

勿論あたしには彼女の動きは見えていたから躲そうとすれば可能だったのだが、いやに思い詰めた眼をしていたのが気になりされるがままになっていた。

尻餅をついたあたしの肩に少女の手が伸びる。その手の美しさに一瞬気が逸れたのを見計らっていたのか、ハツと彼女に意識を戻した時には唇と唇が合わさっていた。

『なに？なに？！なに？！』

混乱し制止の声を挙げようと口を開いた途端に少女の小さな舌が入り込んできた。あまりにも自分の行動の迂闊さに、自分自身へこれでもかと呪詛と悪態を並びたてる。

永劫にも感じた出来事は、実際はほんの一瞬で幕を閉じた。少女の肩を掴みベリッという効果音が聞こえる勢いで引き剥がす。

「あああああのね！何でこんな事しちゃうのか解らないけど、子供がこんな事するしちゃいけないから！！あなたは知らないだろうけど、青少年保護条令っていうのがあってね……！」

顔を真っ赤にしながらも全身に冷や汗が流れるという矛盾が起きているのを自覚しながら、必死に言い募ろうとしたあたしを彼女は素早く土下座することで押し止めた。

「……誠に申し訳ありません。ご立腹になるのを承知の上確かめたいことがあり、彼方様が動揺するような事をわざと致しました。」

顔を地面に確りと付けているため全く見えないが、聴こえる声はまるで泣いているかのように細かく震えていた。落ち着くため、一息を吐くと、それに合わせて彼女の肩がビクリと震える。

「分かった……。とりあえず土下座を止めて顔を上げて。そこまですて何を確かめたかったの……。？あなたが“アレクス様”と呼ぶこの人のことについてかな？」

そうであろうと思いつながら口にしてみた。この子はあたしがこの身体に入り込んでいることを知っている。

彼女はしっかりとあたしの瞳を見つめてながらあたしに対して話をしていた。

「まず、私はこのような姿はしておりますが人ではございません。アレクス・キース様にお仕えする使役竜のシェハラザートと申します。先程の行為は彼方様を動揺させる事によって“精神情報”を得易くするため致しました。」

そこで彼女は言葉を区切ると確認するかのようにあたしの様子を伺う。それに軽く頷く事で話を先に促す。

「実はアレク様が盗賊との戦闘で負った怪我は致命傷でした。……幾ら能力の高い【再生】を行っても助かる状態ではありませんでした。ですがアレク様は助かり、そしてその後の戦闘で見せた能力。アレク様は確かに戦い慣れていた方でございましたが、明らかにアレク様の身体能力を越えた動きをされていたのです。また、治癒能力も然り。あの女性ごときの【再生】では到底動けるはずもないのに彼方様は悠々と動いていらつしかったです。……アレク様が目覚め

るまでに何かがあつたのは間違いないのです。私はある事を仮定し、それを確認するため彼方様の“精神情報”を取得させていただきました。」

「あのね、“精神情報”って何のことかな？」

あたしは何度か話の中に出てくる言葉に疑問を感じ言葉を挟んだ。また、その情報を取る為に何故キスをする事が必要なのかも一緒に聞いてみる。

「はい、“精神情報”とは“魂の情報”を指します。人が一人一人声紋、指紋、動脈、姿形等が違うように魂もさまざまな色や形があり誰一人として同じになることはありません。また魂と肉体は密接に結びついており、例えば無理やり肉体に憑依しようとしても肉体が拒否反応を示すため、気絶又は自傷行為を繰り返すのです。ですが彼方様は何れの行為もせず、それどころかアレク様とよく馴染んでいらつしやる。実は“魂の情報”と“肉体の結びつき”を的確に調べる為には接吻もしくは生殖行為といった相手と強く結びつくような行動が一番効率が良いのです。そして調べた結果、アレク様と彼方様の“精神情報”は色彩こそ違えども魂の形は全く一緒でございました。」

そこまでいうと、彼女はあたしを慈しみに満ちた目で見つめ深々と頭を下げた。

「この度は、大切な主であるアレクス様の命を救ってくださり誠にありがとうございました、異世界の娘よ。いえ、違う次元で生まれたアレクス様。貴女が重なってくれたお陰でこうしてこの方は生きている。あなたの魂の中で眠り続ける主に代わり御礼申し上げます。」

彼女のその心の籠った告白を、あたしは呆然としながらも不思議

と納得して聞いていたのであった。

1章・4（前書き）

何とか今日中に出来ました。一部変更と加筆してあります。感想お待ちしております！！

1章 - 4

シェハラザードの告白の後、あたし達はいろいろな話を話した。

まず、お互いの一番の疑問であった“何故あたしとアレクの魂が融合してしまったのか”ということであるが、所詮仮定でしかないのだが、どうやらあたしとアレクはほぼ同時刻に死んでしまったらしい。そして死んでしまったときに生じた魂の欠損が本当にありえない偶然ではあるがアレクとあたしはお互いがピタリと補い合うように出来ていた。これは“精神情報”で確認したので間違いなく、あたしとアレクの魂はまるでパズルのように2魂で1魂という状態になっているそうだ。また蛇足ではあるが1魂となったあたし達の魂は、シェハラザードによると「黒真珠のように様々な変化を見せるのがとても綺麗で魅力的ですわ。精気も大変おいしゅうございますので神仙・妖魔の類には十分にお気をつけくださいw」とのこと。お願いだから舌なめずりしながら上目遣いでこっちを見ないでください！！

そして、あたしがこちらの次元に来てしまった理由・・・これこそ推測でしかないのだが、多分車に刎ねられた途端にあたしの魂も肉体から大きく跳ばされてしまったのであるう。以前聞いた話ではあるが、次元の境目は思ってたより身近にあるようで、それに偶々タイミンが良く入り込んでしまったのではないだろうか。あたしはこのことを教えてくれた親友のことを思い出し思わず笑みを浮かべながらシェハラザードに説明した。そんなあたしの顔を見ていたシェハラザードの頬が赤く染まったのは、気のせいだと全力でスルーしとく。

アレクシスは・・・あたしの中で懇々と眠りに落ちている。彼の

ほうが思考を司る魂にダメージが大きかったので、回復する為にひたすら肉体の主導権をあたしに委ねているようだ。肉体の無意識の反応や時折浮かぶ思考等はアレクの寝相や寝言に値するらしい。・
・ってか、もしアレクが起きたら所謂二重人格っていう状態になるんじゃないか？！ちよつと想像すると怖いのでアレクはもうちょつと眠っていてくださいと心の中で手を合わせた。

さて、一通りあたしに起きた出来事を整理出来たところでアレクとシェハラザードの関係とずっと疑問だった【再生】や盗賊の一人がはなった火炎弾について説明を求める。シェハラザードも“精神情報”からあたしが居た世界にないモノであると理解しているので直ぐに答えてくれた。

アレクとシェハラザードの出会いは今から約1シークほど前に遡る。（ちなみに1年は13ヶ月で、1ラスは25日あると教えてもらった。融合しているのにアレクの持つ情報が引き出せないなんてなんて不便・・・）ある日、シェハラザードが大好物のピチュの実（桃に似た甘い果物。ドラゴンはこれに目がなく、猫にマタタビ、ドラゴンにピチュとされるほど見つけるとまっしぐらになってしまふそうだ）を美味しく頂いていると、運悪く荒くれ者のヘビモスに襲われ瀕死の重傷を負ってしまった。そこに偶々近くで狩りをしに來ていたアレクが助けに現れ、ヘビモスをフルボッコし追い返すとシェハラザードに血の契約をさせ自分の精気を分け与えて命を救ったそうである。

・・・何というイケメン設定。登場の仕方がそのまんま正義の味方じゃないか！同じ魂の筈なのに神様は不公平だー！！・・・とイジケモードに入ろうとしたあたしはそこで、気になることをシェハラザードが言っていたのを思い出した。

「あのさ、シエラ。ヘビモスってもしかして巨大なイノシシみたい
なモンスター？」

「はい。良くご存知ですね！！貴女様のいらっしゃった世界にもヘ
ビモスは居たのですか？！」

「いやいや、想像上の生き物として描かれていたモンスターなんだ
けどね。でさ、ヘビモスって強いのか？」

シエハラザードは先程とは違う理由で顔を紅潮させながら全身で
肯定の意を示す。

「もちろんです！！ヘビモスはモンスターのランクで云々と中級種
ですが、その中でも限りなく上級種に近い強さを持っています。嘗
て2匹のヘビモスが7日間縄張り争いを続けた結果、大陸が割れた
という文献が残されているぐらいです。」

彼女は大きく胸を張り、『どうだー！』という可愛いポーズをし
ているが、かえって気になる点が強調されてしまった。

「じゃあさ、何で盗賊相手にアレクは瀕死の重症を負ってしまった
の？いくらシエラが人質にされたといってもさ、それだけ強いにな
ら何か対抗手段があつたように感じるんだよね？」

あたしがその質問をすると、シエハラザードは胸を突かれたよう
な痛々しい表情を浮かべた。

「・・・それは・・・」

シエハラザードはそこでいったん言葉を区切ると、何か逡巡する
ように視線をそらしたが、やがて覚悟を決めたようにあたしと目を
合わせると続きを話しはじめた。

「そのことは先ほど貴女様が聞きたいと仰っていた【再生】【火炎

弾」と関わってくることなので、一緒に説明させていただきます。まず、【再生】【火炎弾】といった能力は魔法と呼ばれる力でございます。この世界・・・アンティスと呼ばれていますが、アンティスに存在する全てのものには魔力が満ちており、無論人も例外ではございません。人は自分の体内にある魔力「生命エネルギー」を交換しあのような力を生み出すのです。しかし、人は直接魔力を放出する事ができません。身体の中で一番鋭敏といわれる感覚器官・・・掌に、放出口として魔力を収束する性質のある石“魔晶石”を組み込んだ“魔道陣”が触れていることで初めて発動するのです。そして“魔道陣”とは収束された魔力に力の方向性を付ける役割を果たします。なので先程の魔法はそれぞれ【再生】と【火炎】の陣が組みまれていたのです。先程魔力とは生命エネルギーと同義とお話しましたが、このため人はどうしても魔力を使い続けるのに限界があります。ですが、人の中であるとある民族だけがこの理を外れて自分の魔力以上の力を行使し続けることが出来ました。」

そこでシェハラザードは一息ついて、あたしの顔を確認してから更に言葉を紡いでいく。

「魔力はこの世界に存在するものに宿っています。その民族は魔力のことを“氣”と呼び、世界に満ちる“氣”を感じ体内に取り入れ体内で“氣を練る”と言う行為を行うことにより“魔道陣”を使う必要も、己の生命力を気にすることもなく魔法を使うことが出来るのです。」

「もしかして・・・それがヘビモスをフルボッコしたアレクの力の正体？」

「・・・はい。アレク様はその民族の数少ない生き残りです。」

シエハラザードの声が細かく震え、その瞳から堪え切れない涙がほおにゆっくりと伝っていた。

「その民族は確かに魔力の使い方は優れていましたが、他の人間に比べると遥かに体格や体力は恵まれていませんでした。ですが、他の民族にない特徴・・・黒目黒髪で、男女共に幾年を重ねてもとても若々しい姿を保っていたそうです。このため自在に使える魔力と共に不老の人種としてそれぞれの秘密を探る為に文字通り“狩り”の対象となってしまうたのです。この民族の人たちは、何とか“狩り”を止めさせようと彼らが欲した魔力の使い方・・・世界に満ちる魔力を感じることさえ出来れば誰にでも簡単に身体に魔力を取り入れることが出来ると説明し、またそのやり方を教えようと試みたようですが、結局その努力は報われることはありませんでした。他の国々の人間は宗教や思想の違いからか、彼らの行っている事が全く理解できなかったのです。最終的にその民族の国が発見されてから滅亡するまで50シーク掛からなかったといわれています・・・そして残った民も長い年月が経ち散り散りとなってしまう、最早純血の民族は全く居なくなってしまうました。辛うじてアレク様がいる隠れ里に僅かに身体的特徴と“氣”を操ることが出来る人が残っているだけです。また、こうした理由から盗賊に襲われたときにもアレク様は魔法を使うことが出来ませんでした。不用意に魔法を使うことで民族が生き残っている隠れ里が発覚する事を何よりも恐れた為です。」

さつきから胸が、抉るように痛い。血の気がどんどん引いていつて酷い耳鳴りがする。

・・・ああ、アレクの心が啼いているんだ・・・先祖の受けた苦しみを思い、隠れなくては生きていけない、滅ぼされる恐怖を思っただけで啼いている・・・

「アレク様の民族の失われた国の名を“ワ”国と言い、国名に因み“ワ”名を生まれた時に与えられます。そしてアレク様の“ワ”名・^{マナ}・真名は“ムトー・シノブ”様と言います。」

そこまで聞いたあたしはもう耐えられなかった。真っ青になった顔を隠そうとして震える両手を顔に当てて必死に動揺を抑えようとしたが結局失敗してしまった。振り絞るように出した声は思っていた以上に掠れて、まるで老人のようだった。

「・・・あたしが今知っていることを話すね。あたしの向こうでの名前ってさ“武藤 忍”っていうの・・・それとね“ワ”国という国名はあたしの居た世界では大昔に使われていた国の名前だね、向こうの国の言葉で国名を書くとき“倭”というんだ。しかもその国は単一民族国家で、身体的特徴としてはほぼ全員“黒目黒髪”なの・・・勿論あたしもそう。そして、他の国の人からよく成人でも子供と間違えられるぐらい童顔な民族なんだ。・・・あたしも、向こうの世界の“倭国”の民だったんだよ・・・これってさ、本当に偶然なのかな?!あたしとアレクが融合したのってさ・・・?!」

あたしの悲痛な声にシェハラザードは血の気を失った顔を向けた。そして、あたし達の疑問に答えが返ってくることも当然なかったのだった。

暫らく冷静になる為にお互い手にしていた水筒から水を口にし一息ついてから、あたしはシェハラザードはへ口を開いた。

「取り合えず、アレクがおもいつきしレッドリストに載っていて、見つかったら即乱獲&捕獲対象な危険に常に晒されているのはよー

く理解した。でもね、いくら混血と言えアレクも“ワ”国の民の特徴を残しているんでしょ？あの馬車に乗り合わせていた人達は何も言わなかったけど？」

うん、そんな珍しい人が居たらあたしならまじまじ見ちゃうと思う。そんなあたしの質問に、シェラハザードは丁寧に教えてくれた。

「ええ、その事については左手首に嵌めているリストバンドに秘密があります。そのリストバンドは一見、【身体能力向上】の魔道陣がタイプ別に3種類組まれています。が、実際は残り2つは巧妙に【魔力封印】と【外見変化】の陣が隠されているのです。」

あたしは言われて自分の左手首を見ると、革製のリストバンドの内側に碧みを帯びた半透明の魔晶石が均等に3つ配してあり、その石と革を固定するため銀で枠が嵌めてあった。そして枠には少しずつ違った紋様に文字を組み合わせた複雑な模様が掘り込まれていた。

「この【外見変化】の魔法のため、今のアレク様の外見はこのアンティスの一般的な青年に観えるようカモフラージュされているのです。」

シェラハザードは持っていた皮袋を開けると中から手鏡を取り出しあたしに差し出したので、受け取って鏡の中を覗き込んでみた。

ハニーブラウンの肩甲骨まで長さのある髪をざっくりと一つに結んだ、ライトグレーの大きな愛嬌のある瞳を持つ少年と目が合った。年の頃は15〜16歳といったところか。鼻の上に散らばる薄いそばかすがより一層少年を幼く見せている。

「これがあたし？・・・なかなか可愛いねえ！」

うん、印象は柴犬だ！わんこだ、わんこ！！もうぐりぐり頼ずりしたいくらいカワイイ！！もしこんな子が弟でいたらもう構いたくって仕方が無いだろうなーと力いっぱい女目線で観察する。と、そんなあたしをジーツと見ていたシエラハザードが、「ですが！！」とぐいっとなあたしの思考に割って入ってきた。

「アレク様の魅力はそんなもんじゃありません！！本当のお姿は・・・！！」

といつて、リストバンドを思い切り引き抜いた。

「・・・誰・・・このイケメン・・・????」

なんか、隣で「アレクシスさまー！！」という黄色い悲鳴が聞こえて物凄い力で抱き付かれているのが全く気にならないくらいあたしは帰って鏡に映った姿に釘付けになってしまった。だが、どさくさ紛れに頼ったにチューをされるのは全力で拒否をする。

でもさ・・・なんだよこの顔。嫌味じゃなくて目が合ったら妊娠するっていうか、もう好きにしてー！！って裸で抱き付きたくなる顔って、あたし初めて見たぞ。本当に何なんなの！！この歩く性犯罪者誘発野郎はよ！！

アーモンドをもう少し横にスツと引き伸ばしたような、はつきりとした二重の切れ長の黒い瞳。その瞳の印象を決してきつくすることなく、だが強い意志を感じさせる細めの眉。高過ぎず、いっそ爽やかなぐらいすっと伸びた鼻梁。少し肉厚だがそれが抜群のフェロモンを漂わせる唇。そして東洋人のように肌理が細かく且つ健康的に日焼けしたみずみずしい肌が野性味を与え、然しながら癖の無い艶やかな黒髪が持つ清冽な雰囲気との完璧なバランスを取っていた。

しかもこんな色気ムンムンな顔をしてる癖にどう見ても高校生にしか見えないって事が更に犯罪者予備軍の幅を色々と大きく広げているような気がするのは気のせいではあるまい！！

判った！・・・こいつの体臭は絶対シトラスとかライムとかいう柑橘系だ！！そしてベットに入るとムスクとかいったオリエンタル系に変化するに違いない！！

心の中でよく解らない事をばやきながら、全身全霊を持って『神様って絶対不公平だあああー！！』と絶叫し、さっきから頑張ってる頼っぺたにキスする為迫りまくるシェラハザードを必死に押し留めつつも、もしかしたらアレクもこんな事ばかりで自分の顔が嫌いになっちゃったから正反対の姿に変化してるのかもしれないとふと、そんなことが頭に浮かんでいたのであった。

1章・5（前書き）

今回は結構短めです。ちょうど区切りが良かったので・・・

1章 - 5

ガタゴトガタゴト・・・一夜明け、あたし達は馬車に揺られて一路首都に向かっています。

昨夜、何とか貞操の危機を脱した後、シェハラザードに何で馬車に乗っていた聞いてみた。

すると彼女は緩慢な動作で皮袋の中から一通の手紙を取り出すと「どうぞご覧ください。」とちょっと眉間にしわを寄せながらあたしに手渡した。

蠟で丁寧に封をされていたその手紙には、とても綺麗な字体で、

『そろそろ帝都に遊びに来い』

『2月^{ラス}ほどしたら闘技場が開かれるからまた手合わせをしたい』

『もうそろそろ冒険者なんてヤクザな商売は止めて仕官したらどうだ』なんて事がつらつらと綴ってあった。

もう書面から世話焼きっていうか、この人アレクのことをホント気に入ってるんだなーって言うのが伝わってくる暖かい内容で、正直シェハラザードから聞いたアレクの秘密が結構堪えていたあたしにはちよつと読みながら目尻がジンワリしてしまったのだった。

でもさ、ほんとに内容が異様なぐらい超心配性なの。生水飲むなとか、飯は3食栄養バランスを取ってキッチンと食えとか、ちよつとでも怪我したら直ぐにシェハラザードに直してもらえとか、早く彼女見つけるとか、お前はどこぞのお母さんかってぐらい事細かに注意事項が書かれていた。ていうか、此処まで心配されるアレクシ

スの素行と手紙の送り主の関係性が凄く気になるんですけど！

どんな過保護さんからのお手紙ですがと差出人の氏名を確認すると、リヴォーネ国の首都であるファマグスタにお住まいのロイ・カルヴァートさんと書いてありました。

あたしはもう一度良く手紙を読んでみたら綺麗に畳んでしまうと、さつきから不機嫌そうにそっぽを向いているシェハラザードに、「この人とアレクつてどんな関係？何かやけにアレクのこと心配してくれてるみたいだけど」とちよつと聞いてみた。

そのときのシェハラザードは綺麗な眉を思いつきりしかめ、忌々しげに

「アレク様が仰るには好敵手と書いて親友と呼ぶと。ロイが言うには手の掛かる弟だそうです」

・・・あのー、シェハラザードさん、貴女の身に纏うオーラが異様に黒いように見えるのはあたしの気のせいでしょうか？？ちよつと引き気味なあたしに、

「だって！！“ワコク”の方以外であんなに親しくされているのロイだけなんです！アレク様の特別はあたしだけで十分なんですー！！！」

と悔し涙を流していた・・・独占欲ですか、判ります。

なんでも、アレクシスとロイは元々は3シーク程前に知り合った冒険者仲間だそうだ。お互いの性格と戦い方の相性が良かった為一緒にパーティを組んでいたらしい。だが、今ロイは家業の手伝いとかで冒険者を廃業してファマグスタに居を構えているそうだ。

そりゃさー、戦友で同じ釜の飯食った仲同士なら、他の人には相容れない阿吽の呼吸とかも在ったりしちゃうだろうさーねー。

打ち拉がれているシェハラザードに「男子特有の熱い友情だから気にすんな」と、某週間少年誌を思い出しながら励ましておいた。

でもさ、そんな関係なら当然あたしとアレクが別人格であるというとは簡単に判ってしまっし、何より昔話でもされたらあたしは答えられない。なので、シェハラザードと打ち合わせをして盗賊団に襲われたとき強く頭を打って記憶喪失になったという設定を設けた。取り合えず、何を言われても「覚えていません」と言っとけば大丈夫だろう。

こうしてある程度の情報を仕入れて、あたし達はドナ○ナよろしく馬車に揺られながら、これといったトラブルも無くのんびりとした旅路を続けていったのでありました。

そして馬車での旅が再開してから5リス程が経過し、街道も土から石畳へ姿を変え街道周りも随分と整理された民家が増えてきたと思ってきたところ、それはついに姿を現した。

背後をシャルナ湖、前面をスプリット山脈という天然の要塞に守られたリヴォーネ国の首都ファマグスタ。

別名“水の都”とも“神に愛された都”とも謳われるどんな時でも決して水が喰われることの無い都。

あたしはおのぼりさん宜しく物珍しい目で城門が開くのを見ていたが、その裏でアレクシスがまた違った目で視ていたのをついに気付くことはなかった。

1章 - 6 ファマグスタの長い1日？

リヴォーネ国はまだ建国100シーク程の新興国だが、ファマグスタ自体は旧国家の建物をそのまま使用しているため新旧建物が入り乱れつつもそれが独特の活気を生み出している都である。

街はスプリット山脈側に城門が存在し、城門の周囲の内側から中心部に向けて市街地、貴族街、王城といった順番で構成され、近い建築方式で例えるならば、ゴシック様式とアールヌーヴォー建築が乱立しているように感じるが、それが不思議と独特の壮麗且つ優雅な雰囲気を生み出していた。

そんな中でも特に目立つのは闘技場の存在であろうか。ローマのコロッセオを彷彿とされる重圧感漂うこの建築物は、優美な印象を持つこの街の中では一際異彩を放っていた。

そして馬車を降りたあたし達は捕まえた盗賊団を憲兵に出すことで得た僅かな懸賞金を財布にしまうと、痛んでしまった服や保存食料を整える為一旦市場に足を向けた・・・んだけど、もう彼此2時間近くシェハラザードがあらゆる甘味屋さんを男女の区別なく店員さんをその美貌で誘惑し味見をせしめております。無駄に美貌の大安売りをしているのか、それとも経済的にとても効率の良いことをしているのかあたしには良く分かりません！！でもシェハラザードが市場を歩き廻ってくれているお陰で貨幣のことは若干理解できるようになったから、まあ良しとしよう。

メイン通貨は“クローナ”大概このクローナが通貨単位になるんだけど、それよりも単位の小さい硬貨が存在しそれは“シリン”と呼ばれている。ちなみに100シリンで1クローナと言うとても分

かりやすいのは本当にありがたかった。（それと貨幣の種類としては20クローナ銅貨、50クローナ銀貨、100クローナ金貨に分かれていた）大体1日2クローナもあればお腹一杯食べることが出来て、4人家族なら50クローナあれば衣食住足りた生活を送れる金額ということだった。

シェハラザードの様子を見ると甘いものを沢山食べてとっても幸せそうな顔をしていたので、本来の目的である装備を整えるために露天を探してみることにした。でも、そこは身体は男でも心は乙女・・つい装備よりもシェハラザードの洋服選びの方について熱が入ってしまった。いや、可愛い女の子は何を着ても似合うからもう選び甲斐があるある！

結局迷った挙句、綺麗な赤毛を引き立たせるためライトグリーンのシフォンのような柔らかな素材のワンピースと動きやすさを重視してオフホワイトのスパッツのようなズボンを重ね着することに決めた。ワンピースは襟ぐりと裾部分に金糸で細かく唐草模様が刺繍されているのがとても上品でスカート丈も膝上ぐらいなのでそれだけ単品で着ても十分に可愛い造りになっていた。

また、髪の毛が腰まであるため一緒に髪留めもコーディネートする。パピヨンの翅が薄い緑と金色の七宝になっていてそれが太陽の光をキラキラと反射することで彼女の可愛らしさを一層輝かせているのに非常に満足したのであった。

で、あたしの服選びというところごくあっさりとしたものだった。目に付いた襟に銀の簡単な刺繍の入ったシンプルな黒いシャツとそれと揃えて置いてあったスボンに脚を通し、その後上半身に薄い金属板を挟み込んだ黒く染め上げられた軽量さが売りの革鎧を身に付け、最後に武器屋を覗き身長ぐらいの長さのある棒を取り、素材と

重さを確認するとこれを購入することにした。

あたしの手に取った棒を見てシェハラザードが不思議そうな顔をしていた。うん、そうかもしれないね。もうアレクシスの武器としてロングソードを持っているのだから。でも、いくら『人殺しも時と場合によっては許される』世界に來たとしても、あたしは人の身体を斬るという行為を出来るだけしたくはなかった。日本と言う戦争のない国で育まれた倫理観。それとこの記憶だけがあの世界からあたしが持つてこれた最後の財産。あたしは自分に残されたその財産を守る為、相手を成るべく生かすしながら攻撃力を0にする為に棒を持つことにしたのだ。まあ、棒といっても鉄で表面を包んでいるから十分に殺傷力はあるけれど剣よりは全然マシ。

さて、一通り市場も堪能したことだし、そろそろ手紙の送り主に会いに行こうかと4メートルほど前を跳ねるように歩いているシェハラザードに声を掛けようと目を遣ると、丁度シェハラザードの身体が真横に引っ張られ路地の奥に引き擦り込まれていた。

「シェラ！」 大声を上げ人を掻き分けシェハラザードが引き擦り込まれた路地に飛び込む。しかし左右に入り組んでいる構造の為に今日の前で起きた出来事なのにもうその姿を見ることができなかった。

くそ！！あんなに人目を引く子なのに！あたしは今居る世界とまだ日本と同じ感覚で居たのか。人殺しでさえ理由があるなら正当化される世界なんだからちょっと目を放したらあんな綺麗な子がどんな目にあうか、少しの想像力を働かせたら直ぐ判るだろうに！！

自分を思い切り罵りながら路地の奥へ奥へとシェハラザードの姿を探し血眼に走り回る。奥は迷路状態のスラム街になっていて、必死にもしかしたらシェハラザードが上げているかもしれない声を聞

き取ろうとしても全く聴こえず、辺りを探っても気配も感じることが出来なかった。更に奥に進んで行くと無気力に座り込んでいる子供達が居たため、こちらに赤髪の女の子が拐かれて来なかったかと聞いてみるが、いずれの子供も申し訳なさそうに目を逸らし返事をする事はなかった。

その彼らの姿を見て確信する。シェラハザードはこのスラムを統括する組織にさらわれた。

あたしは余りの自分の情けなさで無力さに、目の前が真っ赤に染まったかと思うほど怒りに駆られていた。こうして手を拱こまいているうちに益々彼女は手が届かない場所に連れて行かれてしまう。

『シェラ、シェハラザード！！何処だ、せめて何か手掛かりが・・
・！！』

思わず余りの不甲斐なさに力いっぱい唇をかみ締めた。口の中に血の味が広がる。

と、その途端 頭の中に涼やかな鈴の音が鳴ったと感じた瞬間あたしの知覚範囲は全方向に対し爆発的に広がっていた。それと同時に感覚は一つに集約され真っ直ぐ神経が伸びるかのごとく1方向に進んで行き、ある地点にある鈴の音と辿り着き、それと完全に結合するとあたしは夢から覚めたように覚醒し何が起きたかを完全に認識する。

“ 血の契約 ” その意味をあたしは理解した。

アレクシスはシェハラザードに己の血と精氣を与えることで相手の身体を自分の身体の一部へと変化させていた。自分の身体なら目を瞑っていても何処で何をしているのか当然理解できるし、“ ワコク ” の民のように自分のキャパ以上の魔力を保持できるようになっ

たからこそ、瀕死状態のシェラハザードにキャパ以上の生命力魔力を強制的に注ぐことによって通常の【再生】では不可能な傷も癒すことが出来たのだ。

そして、今あたしはシャルナ湖に向けて全力で走り出した。小さくか細く鳴っている鈴の音

シェハラザードがそこに居るのを確信して。

1章・7 ファマゲスタの長い1日？

シャルナ湖はスプリット山脈に囲まれたファマゲスタにとって無くてはならない物流の拠点である。

満々と満ちたシャルナ湖の水はサイオン河へと流れ込み、北にある大海へと通じている。この為古くからファマゲスタは交通の要所として、また山海の出入り口として発展を続けてきた。ファマゲスタと隣接している湖畔は辺り一面護岸工事が施されており尚且つ大型船が着岸出来るような大規模な港が造られ、港の周りには物流の中心地であることを象徴するかのように沢山の倉庫がひしめき合うように乱立していた。

そして、その倉庫街の中でも更に奥まった所にある、人の手が入っていないような古びた倉庫の中から鈴の音は聞こえてきていた。

あたしは正に飛ぶような勢いで港まで辿り着くと倉庫の位置に中りを付けると、周囲の状況を確認しながらゆっくりと倉庫への距離を詰めていった。

倉庫の出入り口は正面と左横に各1つ。正面から5メートル程上に明り取りの窓があり、侵入するにはその何れかしが経路は無いであろう。中の気配を探ると1箇所固まって6人ほど、若干それより離れた所に3人、そして出入り口付近に各2人感じる。

ここで一気に強襲するって云うこともできるが、余りにも倉庫内に居る人が多すぎる。それに闇雲に動くとシェハラザードに危険が増すからそれは避けたい。さて、どのように侵入しますかね・・・と考えていた所で後ろから気配を感じあたしは弾かれたように後ろ

を振り向くと、腰を落とし直ぐ動けるよう体勢を構えた。

「あら、坊やがこんな所で何をしているのかしら？」聴こえてきた女の声に更に警戒を強くする。

倉庫の影から紅いロングスカートの裾が見え、ついで壁に片手をつきながらゆっくりとした動作で女がその全身を露わにした。

年の頃は20代前半ぐらいだろうか。薄汚れた真紅のロングワンピースを身に纏い、その胸元はギリギリまで大きく開けられていてその豊満な胸と肌の色の白さが強調されていた。少し下がり目の目尻と目元の泣きボクロが妖艶さを与え、そして少し乱れた状態の灰色の纏め髪が彼女の婀娜めいた雰囲気とよく合っていた。

「もしかして迷ってこんな所に来たのかしら？」彼女は煙管を一服すると息を吐きながら言葉を続けた。

「ここはね、荒っぽい連中が多いから坊やみたい育ちの良さそうな子には危ないから早く街へお帰りなさい。」

艶やかな笑みを浮かべ煙管を吹かす彼女を警戒を解くことなく見つめながら慎重に口を開いた。

「帰れません。」

「まあ、それはなんで？」

「ここで俺にとって命にも代えがたい大切なものを無くしました。・
・見つけるまでは帰れません。」

「・・・そう、でもねもう日も沈んでくる時間。いくら大切なものでも自分の命が無くなるよりはマシでしょう？」

彼女の言葉で改めて太陽の位置を確認する。確かにもう夕方近い時間になり、周りの雰囲気は刻一刻と悪化しているのが感じ取るこ

とが出来た。そんなことを感じたあたしに更に彼女は言葉を繋げる。

「今日は一度出直して、明日日が昇ってからまた探しに来なさい。
・ ・ ・ の方があなたの為よ。」

あたしは彼女の思いのほか強い力を放つ目をじっと見返しながら
ゆっくりと首を横に振った。

「 ・ ・ ・ 明日になれば、大切なものを完全に失ってしまいます。今
でなくては駄目なんです。」

「何を失ったか、訊いてもいいかしら？」

「いえ、個人的なことなので ・ ・ ・ では失礼します、御忠告ありが
とうございました。」

頭の中に響き渡る鈴の音をずっと感じながら、あたしはこの彼女
との不毛な会話に焦れていた。

シェハラザードは直ぐ近くににいるのに助け出せない焦燥が募り、
ついに会話を一方的に終わらせると女性に意識を向けつつ背を向け
て目的の倉庫へ近づこうとした。

「お待ちなさいな。」

あたしは耳元で聴こえた思いのほか強い口調の言葉に驚いて振り
向いた。見ると彼女は全く動いた気配は無いが声だけが聴こえる。
あたしの背中に冷たい汗がゆっくりと流れ落ちた。

「安心なさい、【風脚】の魔法の応用よ。」また耳元で声が聞こえ
た。彼女は続けて

「たぶんあなたの探し物が何であるか大体の想像が付くわ。 ・ ・ ・
ねえ、あなたが必死になるのも分かるけど貴方が不用意に行動する
ことで貴方が探しているような失せ物が沢山もう手に入らない場所
に行ってしまうのだけれど、それでも良いのかしら？」

「 ・ ・ ・ ということか分かりませんが、仮に貴女が仰った内容が

その通りだったとしても俺には貴女を言うことを信じるにはまだ根拠が足りませんが。」

魔法を使われたことであたしの警戒心は格段に跳ね上がる。右手に持つ棒を強く握り締めながら、しかし彼女が言った内容がとても気になり更に彼女の話促した。

「ええ、確かにその通りね。でも、あなたが一人だけで探し物を見つけようとしても色々と上手くいかないのではなくて？それに・・・」

そこで彼女は一息つくと、あたしの顔をしっかりと見ながら嫣然と微笑み一言一言区切りながらいった。

「あなたの探し物は今日の夜半まで動かないわよ。」

ギン！！

その言葉を認識した瞬間、あたしは一瞬で彼女まで跳躍するとその勢いで金棒を突きつける。が、彼女は持っていた煙管で金棒の軌道を呆気なく変え受け流すと涼しい顔のままあたしを見上げた。

「何故そんなことをあなたが知っている！？」

「それを知りたいのならあたしに着いていらっしやい、ぼうや。ここでは詳しい話はできないわ。」

その言葉を合図にあたし達は互いの獲物を引くと、女性は身を翻した後について来るよう目配せをする。あたしはそれに頷くと一度シエハラザードが捕らわれている倉庫をじっと見つめ、改めて鈴の音がそこから聞こえることを確認してから女性の後に続いて歩いていた。

あたし達はそれから15分ぐらい歩いた倉庫街の一角にある宿に入っていた。

1階に酒場と2階を宿屋を構えているごく普通の宿であったが、どうやら彼女はちよつとした人気者らしく酒場に屯していた酔っ払い達からしきりに声を掛けられるのを笑って上手くあしらいながら、マスターに一言声を掛けるとどんどん2階に上がって行き、最奥の部屋に入るとあたしを招きいれドアを閉めた。

そして、部屋の中に置いてある本棚の中から1冊の本を奥へと押し込む。すると、何処からか「カチツ」と鍵のような音が聞こえた。その後彼女は本棚を左にゆくりとスライドさせると本棚の奥にもう1枚扉が存在し、居住まいを正してから扉を軽くノックした。

「どうした？」中から男の声が聞こえてくる。あたしは少し腰を落とし直ぐに動けるよう体勢を変え様子を伺う。

「失礼します」と扉を開け、女性は先程までと全く違った雰囲気になり中に居る人物へ敬礼する。

「モイラ・ヘインズ少尉です。閣下、例の件で関係者と思しき人物と接触した為こちらに連れて来ましたが如何なさいますか」

「・・・こちらへ通せ」

モイラと名乗った女性は「どうぞ」とあたしが部屋の中に入るよう促した。部屋の中は想像よりも大きく10畳ぐらいの広さがあり正面に大きく窓とかなり重厚な造りのデスクがあるのがとても印象的で、良くも悪くもそれ以外は本棚以外家具らしい家具が全く無い殺風景な部屋であった。

一通り部屋の中を観察し終わるとあたしはこの部屋の主たる人物に視線を移す。思っていた以上に若い男性であったが、その男性は

あたしの顔を見て驚愕の余り動きが止まっていた。

「・・・？閣下？」彼の様子に思わずモイラも声を掛けるのを躊躇っているようだったが、その声で我に返るとあたしの顔を見ながら懐かしそうに顔を綻ばせた。

「久しぶりだな、アレク。・・・まさかこんな事でまたお前に会うなんてな。」

今度はあたしがびっくりする番だった。知り合い？？誰？？

あたしが余りにも驚いたからであろう。彼は人の良さそうな顔に苦笑を滲ませ、

「こんな格好しているから驚くのは無理ないか。俺だよ、ロイ・カルヴァートだよ。」と屈託の無い笑みを浮かべた。

あたしはそこで改めて彼を見直した。見事なブロンドに蒼天の瞳。一見貴族的に感じる美貌ながら印象はあくまでも男性的であり、ブルーに金糸で刺繍されている軍服に身を包みながらも判る無駄の一切無い鍛え上げられた肉体と185センチほどは有ろうかという立派な体格がその事を更に裏付けていた。

ロイ・・・手紙の人だ！！漸くそこで記憶が繋がり、あたしはシエラハザードから聞いていたロイに関する情報を脳内から引っ張り出す。たしか、アレクにとっては兄貴のポジションで冒険者仲間。最近家業を手伝っている・・・で、さっき閣下って呼ばれていたからもしかして家業って軍人かよ？！

シエラハザードが攫われた今、知り合いに偶然出会えたことは間違いない。僥倖に違いないのだが、この記憶が無い、彼の事を一切知らないと言う状態をどう説明し協力を求めたらいいのか・・・あたしは心の中でそつとため息をついたのであった。

1章・8 ファマガスタの長い1日？（前書き）

ユニーク&お気に入り&評価してくださって本当にありがとうございます！
ざいます！！

それを原動力にしてがんばります！！ほんとに大感謝です^^
！

1章 - 8 ファマゲスタの長い1日 ?

．．．．えっ．．．うえ．．ん ひっい．．．．いえっ．．．
ひっく

．．．．．身体がいうことを利かない．．．．．なんだろう．．
．？泣き声が．．．聴こえる．．．？

瞼がとても重い。開くにもとても体力を使う。けれど、堪えるよ
うな小さい子供の泣き声が気になって、何とか目を開いてみた。

大きな檻の中に、とても小さな子供達が5人ほどお互いを支えあ
うように1箇所固まり、そのうち数人はシェハラザードの身体に
縋り付いて泣き声を抑えながらも必死に彼女の身体を揺さぶり続け
ていた。

．．．な．．．．に？此処は ？

先程から、意識が朦朧として上手く頭が働かないのを、必死にな
って思考を組み立てようとする。確か、あたしは

ああ．．．あたしは、アレク様と市場でお買い物をして
いて お洋服と髪飾り買って貰って．．．．うれしかったの
それではしゃいじゃって．．．それで

『シェラ！！！！』

「アレク様！！！！」

そこまで思い出すと、完全に自分に何が起きたのか把握できた。そうだ、あたしは買い物途中で拐わかれたんだ。急に引つ張られたと思ったら何かを嗅がされて急速に意識が落ちてしまった。

『アレク様の従者たる身に在りながら、なんとという失態を・・・』誘拐された恐怖より、アレクシスに心配を掛けているということが心に重く押し掛かり、思わず唇をかみ締める。

あの異世界から来た娘は必死に自分に隠そうとしているが、この世界に来て想像以上に精神に負担を掛けていた。いつも笑っているけれど、ふと一瞬とても暗い眼をする時があるのをシェハラザードは知っていた。

ピンと限界まで張り詰めた糸。

そんな彼女の支えになりたいのに。自分の命の恩人であるアレクシス。そのアレクシスの命を助けた忍。その二人の心の安らげる場所になりたいのに。

自分の願いと全く逆の状況になり、余りの自分の不甲斐なさに耐え切れない涙がぼろぼろと溢れ落ち、膝の上に握り締めていた手の上に吸い込まれて消えていく。

そして、そんな彼女の感情に引き摺られたのか、周りの子供達が泣き声を挙げようとした途端、檻の中に幾つかの飴玉が乗った手が差し出された。

「ほら、みんなあんまり泣くと目が溶けちゃうっていうぜ。こんなしかないけど、みんなで分けあって食べな。」

こんな状況で余りにも場違いなとても優しい声が聞こえ、シェラ

ハザードを始め子供達も途端に泣くのを止め声の主をまじまじと見入った。

アッシュブロンドの髪に明るい真冬の青空の瞳。啞えタバコをした唇は悪戯っぽそうに弧を描いている。10人中7人は格好良いと表現しそうな顔をしているのに、全身から漂う悪戯鬼といった雰囲気。その印象を大きく下げている。だが、それさえも楽しんでいるような飄々とした空気を身に纏っていた。

「その飴玉さ、“アンジェリカ”で買ってきたからきつと美味しいぞ。」

彼はそうフアマグスタでも1、2を争う有名菓子店のお菓子であると言っと、それまで沈んでいた子供達の顔に少し明るさが蘇り、先を争うように飴玉を口に頬張ってゆく。その顔をニコニコしながら見ていた彼は、まだシェハラザードが口にしていないのを見ると包装紙を捲り、おもむろに「ほら、お嬢ちゃんも」といって彼女の口に押し込んだ。

シェハラザードの口の中に、柔らかい、染みとおるような甘さが広がり、ささくれ立った心をジーンワリと癒していく。

彼女の顔つきが穏やかになったのを確認すると、彼はちょっと顔を近づけ気のせいかなと思うぐらいの小さい声で一言

「もう少しだから、みんながんばってくれ」といって何事も無かったかの様に表情を消し、他の見張りのところに戻っていった。

その彼の姿を呆然と見送っていたシェハラザードであったが、自分のあずかり知らぬ所で何かが動いていることを察すると、子供達を確りと見つめ何かあった場合は自分が出来うる限り守ろうと心に

誓うのであった。

さて、あたしはロイと暫く見詰め合ったまま何と会話を切り出していいのか思案に暮れていた。

いきなり『記憶喪失なんです』といっても普通は信じないだろう。それに此処に来るに至った状況が状況だ。あたしなら絶対に疑う。そんなことをつらつらと考えていると、思いも寄らぬ所から会話の切欠はやってきた。

「閣下？そちらの方とはお知り合いですか？」

モイラは、ロイの態度を見て知り合いであるとは確信していたが、上官の口から状況の説明を求めている。

するとロイは彼女の強い視線を受け、まるで悪戯が見つかった子供のようなバツの悪そうな表情を浮かべつつも冒険者時代の話を取り上げつつ、

「ほら、以前話した・・・」と続けて彼女へのそれ以上の説明を濁していた。

すると彼女は少し記憶の淵を彷徨った後、直ぐ思い当たることがあったらしく、「ああ！あなたが・・・」と声を挙げ、モイラはしみじみとあたしの全身を見て納得したように頷いたのだった。

・・・なんか、どのような説明をされているのか非常に気になるんですけどね・・・

二人の応対をみて、取り合えずあたしが誰であるのかは説明不要と判断する。と、ロイはふとそれまでの穏やかな雰囲気を変え、笑みを消してこちらに向き直ると、

「ところで、アレク。シェハラザードの姿が見えないが・・・」

いつも傍に居て決して離れない存在がいつまでたっても現れないことに疑問を投げかけてきた。

これこそがあたしが此処に着いてきた理由であり、一番に尋ねなければならぬ問題である。

自分の中で状況を整理する為一つ息をすると、あたしは今まで起きたことを1つ1つ説明することにした。

ファマグスタに向かう最中、盗賊に襲われその時記憶をほぼ全て失ってしまったこと。

ロイの手紙を頼りにファマグスタに到着したが、市場で買い物の途中シェハラザードが攫われてしまったこと。

何とか捕らわれているであろう場所を突き止めることが出来たが、そこでモイラに遭い無謀な行動を窘められ情報を与える旨示唆され、ここまで着いて来たこと。

ロイはあたしが説明している間、視線をこちらに向けたまま黙って話を聞いていたが終わると小さく息を付き、ゆっくりとこちらに近づくと、その大きな手を掲げてあたしの頭の上に乗せクシャクシヤと労わる様に撫で始めた。

「・・・記憶が無い状態でよくがんばったな・・・辛かっただろう。」

あたしはハッとロイを見上げて彼の目をじっと覗き込み、

「記憶が無いことは疑わないのか？」と一番疑問に思っていたことを口にした。

それに対しロイは淋しそうな笑みを浮かべてはいたが、やがて確信を伴った口調で肯定の意を示す。

「いつもと様子が違うのは、お前が入ってきたときから分かっていたさ。お前は俺のことを『初めて観る』っていう顔をしていたし。何よりもお前ももっと騒がしい奴だったからな。」

そう言いながらも、彼の手は止まらず絶えずあたしの頭を力強く、優しく撫で続けていた。

そんなロイの行動に『こんな風に子ども扱いするからアレクが抵抗して騒がしくなるんじゃないか』と思いつつも、その大きな手の温もりにこの世界に偶然辿り着いてしまっただけと堪え、気付くまいとしていたものが溢れ出しそんな気がして、あたしはシエハラザードを助け出すまでは決して気を緩めまいと必死で拳を握り込んだ。

動揺した心を落ち着かせ、意識を完全に切り替え『男』としての仮面を被りなると、勢い良く頭上の手を払いのけ、

「いい加減ガキ扱いは止めてくれませんか？それよりもそっこの情報を教えて欲しいんですけどね。」

と、促すことで少々強引ながらも話題を変える。すると二人はそれを受け表情を引き締め、1歩モイラがこちらに進み出でると「閣下の身元保証があるということと、当事者の一人であるため事件の経緯についてお話しますがくれぐれも特例であると認識してください。」と確認をしてから事の説明をはじめたのだった。

事件は2ラスほど前に遡る。

ある子供が友達と遊んだ後、家に帰宅する途中忽然と姿を消した。両親と軍の搜索も空しく、何か事故に巻き込まれたとも、事件にあったという証言も得られるままリス程経過したある日、また子供が一人買い物の途中に姿を消した。そして、それから実に3〜7リスに一人という異常なペースで子供・・・6歳から11歳ぐらいの見目麗しい子供達が次から次へと行方不明になっていった。

以前も子供が行方不明になるという事件はあったのだが、この最近のように頻繁に発生することは今までに無い異常さであった。この事を重要視した国王は軍に事態の早急なる収拾を図るよう指示をし、それを受けロイを始めとする特務部隊が捜査を開始する。

捜査の結果、スラムを拠点とするある犯罪組織が人攫いを行っており、子供達は倉庫街のある区画にある名義不明の倉庫に数人集められてから、新月の夜に船でシャルナ湖にある無人島へと運んでいくようである。そして潜入している部下からの報告によると今日人数が集まり、移動の条件も整ったので島に連れていくと連絡が入

った。

「そして、今日の午前25時に子供達を乗せた船は出港する予定となっていますが、その中にはあなたの探している人の特徴を満たしている人も含まれて居ます。」

「本当ですか！？彼女の様子は？」

噛み付かんばかりの勢いのあたしに、モイラは安心させるよう淡く微笑みを浮かべつつ、

「それについては安心なさい。潜入中の仲間が接触し、彼女をはじめ一緒に捕らえられている子供達の安全は確認してあるわ。」

私達の仲間を信用なさいと、彼女は優しく訴えかけたのであった。

取り敢えずシェハラザードの無事を聞かされ、一番危惧していた心配が回避されたことであたしはようやく肩の力を少しだけ緩めることができたが、あたしには絶対やらなくてはならないことがある。

「お願いします！俺も一緒に連れて行ってください。」

あたしが二人の顔を見比べながら、自分にとって絶対に譲れない事を主張した。シェハラザードが攫われたのはあたしの不注意に原因がある。彼女はどんな事があっても助けださなくては。

ロイはそんなあたしの様子に苦笑いを浮かべながら「お前の事だから、どうせダメだと言っても黙って付いて来るだろう？」と認めたものの、たが条件があると言葉を繋いだ。

「以前のお前の実力なら大歓迎だが、・・・記憶を失ったお前はどのくらい戦えるのか確認させてもらおう。」

そう言っただけで心底楽しそうな凶悪な笑みを口に湛える男を見ながら、あたしは軽く慄きながらもどこかでこの展開を待ち望んでいる自分が居たことを感じていたのだった。

「地下にちよつとした訓練所がある。そこなら少しなら時間は取れるだろう。ヘインズ少尉もそれぐらいなら大丈夫だろう?」

ロイは呆れ顔をしているモイラを横目にそそくさと絨毯の下に隠してあつた地下通路を開けると、あたしの背中を押してどんと奥に進んでいく。少し湿つた螺旋階段を下りると直ぐ突き当たりとなり、小さな木の扉を開けるとちよつとした大きな石造りの広間に出た。壁に剣やら槍やら並んでいるのを見ると、此処が訓練場なのだろう。

はーっと疲れた声が聞こえ、振り向くとモイラが眉間に手を当て痛みをこらえる仕草をしていたが、露骨に溜め息をつく

「・・・分かりました 閣下、3分です。それ以外は絶対に許しませんので。私が合図したら開始してください。」といって思いつきりロイを睨み付けていた。

なんか、モイラさん色々苦労が絶えないようで・・・ちよつと申し訳なく思つたけれど、不思議と心の奥から湧き上がる高揚感に突き動かされ、すぐ感心がロイに向いてしまう。 判る・・・アレクはロイと剣を交えることをとても楽しみにしていたんだ!! つい、こんな状況なのに笑顔を浮かべてしまった。不謹慎だと思うのに、彼と戦えると思うと気持ちが止められない。

ロイは訓練用の片刃刀を手に取り重さを確かめると、あたしに得物はどれにするか聞いてきたが、あたしは手に持った金棒を見せてこれを使うと合図した。

あたし達は訓練場の真ん中に近づくと、それぞれの位置で構え間

合いを計り始める。永劫のような一瞬が訪れた後、モイラさんの高らかな試合開始の声が響き渡った。

あたしは1歩大きく踏み出すと、上段突き・上段横面突きの2回攻撃後身体を回転させ振りかぶってか左袈裟懸けを仕掛けてみる。が、ロイはそれを難なく見切ると、腰の片刃刀に手を掛けるとぐつと大きく踏み込んできた。刀身が煌めき、刃の残像が見えたがそれを見た途端、全身の肌が泡立ち、咄嗟に棒で受けるのを止め地を蹴り大きく間合いを広げることで回避する。

「……いい判断だ。」

そういつて笑うロイに言いよつの無い寒気を覚えた。頬に冷や汗と、それとは違う液体が流れる感覚が伝わってくるが、それが却ってあたしに気合を与えた。見よう見まねの棒なんて使っていたら本当にヤバイ怪我をする。あたしは金棒を投げ捨てると、緊張で固まった身体から呼吸することで力を抜く。その姿をニコニコしながら見ていたロイは、あたしが落ち着いたのを見計らって声を掛けてきた。

「準備運動はもういいのか？」

「ああ、悪かったな。これからは本気でいかせてもらうよ。」

そう言つて、腰を落とし構えるあたしを心底楽しいものを見ている様子でいたロイだったが、一瞬のうちに表情を全て無くすと凄まじい勢いで突きを繰り出してきた。上半身の急所を狙った複数の重い突きを体裁きで必死にかわし続けて何とか反撃のタイミングを計る。突きをした瞬間の腕が伸びた隙を見逃さず外払いをし、ロイの体制が僅かに崩れたの狙い間合いに飛び込むと中段突きを見舞おうとするが、刃を返すことで回転してきた刀で薙ぎ払われそうになり

咄嗟に上半身を捻って刃を交わすとそのままバク転をしながらロイの顎を蹴り上げた。

一旦、双方共に間合いを取り攻撃のタイミングを伺う。そしてロイが再度腰を落とし踏み込みの動作をし、あたしがそれよりも先に彼の間に飛び込もうとした時、無常にもモイラの「時間です！」という終了を告げる声が響き渡ったのであった。

「・・・で、閣下。お楽しみの所申し訳ありませんが、結果は如何なさいますか。」

そのモイラの声に今更ながら本来の目的を思い出しあたしは不安げにロイを見たが、ロイは再度あたしの頭をグシャグシャ掻き回しながら「少尉、今更そんなことを聞くのか・・・」とつぶやいていた。

「ヘインズ少尉、俺の壱の刀をかわせた奴は今まで全く居なかったのだが、それを見切っただけでも十分に力量が知れると思うけどね。」

「わかりました。では、今回の作戦時では一時的に彼を部隊の指揮下に配することにいたします。」

二人の会話を聞いていたあたしは、思い切り顔を綻ばせる。もしかして、それって！！

「じゃあ、今日は宜しく頼むよ、アレクシス。」

こうして、あたしとロイは改めて握手しあい、何とか今回の救出作戦に加わることが出来たのだった。

1章・8 ファマゲスタの長い1日？（後書き）

・・・今回は本当に難産でした><！もう戦闘シーン書いている方って本当に凄すぎです！！

1章 - 9 ファマゲスタの長い1日？

月がその麗しい姿を隠すことで生まれた漆黒の闇の中、二艘の舟がゆるゆると湖水を掻き分け進んでいく。

一艘は不条理を。もう一艘には道理を。全く逆の思惑を乗せた舟は距離を取りながらも同じ方向に向かっていった。

そんな2艘の舟に対し、湖面には先程から厚い霧が重く立ちこめ、それぞれの思惑を乗せた舟を隠すように包み込み始める。

だが、注意してみると霧が不自然に発生しているのが見て取れるだろう。まるで何人からの干渉も拒絶するかのように。霧は白い闇となり舟を、湖面を、墨を刷いたような世界の上を更に深く塗りつぶしていった。

シェハラザードを乗せた舟が出港したのを確認し、気付かれないよう十分な間隔をおいてから港を出て直ぐだった。

辺りを濃霧が立ちこめ、あっという間に白に覆い尽くされてしまった。あたしはずっと聴こえている鈴の音でシェハラザードがどこに居るのか判別が利くが、普通の人は直ぐ方向をみうしなってしまう。

あたしの不安気な様子に気付いたのか、同船しているロイの部下達が心配するなと声を掛けてきて、この霧がロイの仕業であると説明を始めた。

ロイは【火炎】の上級魔道陣である【紅焰】の使い手である。【火炎】が炎その物の形状を変えたりすることでしか威力の調整が利かないのに対し、【紅焰】は炎のほかに熱や光といった炎を形成している他の要素も操ることが出来る。

この為、彼は湖面近くの空気の層を熱で暖めることによってスプリット山脈から吹き降ろす冷たい風を利用し人工的に蒸気霧を発生させ目くらましとした。また熱を操る能力の派生効果として熱を感じることが出来るため、誘拐犯がどこに居るのか把握できるそう
だ。

『人間熱感知センサー・・・』思わずそんな感想を思い浮かべてしまった。なんか、ほんと魔法って便利なんだねーとその万能さに嫉妬してしまう。

ちなみに、魔法とは生まれ持った能力も大きく関係してくるのだが、それよりも重要なのが発想力だそうだ。

なので、同じ魔道陣を持っている人でもその属性で何をイメージできるのかによって使える力が大きく変わってくる。

その最たる例はロイの熱感知であったり、モイラの【風脚】から生まれた遠話であるという。

だが、その強力な力ゆえにどうしても戦闘に使用が偏りがちになり、生活や補助的目的での魔法はあまり使用されていないということであった。

そんな風に魔法の講釈を聞いているうちに、誘拐犯たちは湖の中ほどにある島に辿り着いていた。

岩礁に乗りつけ、麻袋に入れていた子供達を抱えあげると、次々に島影にある樹木によって隠された洞窟へと入っていく。

その位置を確認したあと、あたし達は岩礁から少し離れた所に舟を乗りつけ慎重に洞窟へと近づいていき物陰から様子を伺って見る。入り口付近に居る見張りは二人。それを見てロイが素早くハンドシグナルで周りに指示を出した。

モニカは【風脚】で大気の振動を抑えることで音が伝わらないようにし、魔法が発動したのを確認してから部下二人がそれぞれ狙い済まして弓を射る。そして、あたしとロイは弓が放たれたのと同時に見張りへ攻撃を開始した。

一人は喉に矢が突き刺さり、血の泡を吹いて倒れるのが見える。吐き気をこらえてもう一人を見ると、倒れた仲間を見て動いたことで矢が逸れ左肩に命中していたが、それでも体勢を崩しながらも腰の剣を引き抜いて迎え撃とうとしていた。

それを見たあたしは一歩足を踏み込みグツと加速を付けると、アップターの要領で下から突き上げるようにして顎に熊手を打ち込む。顎から伝わった強烈な振動により脳震盪をおこし意識を失った見張りを縛りつけ、もう一人の亡骸も一緒に洞窟脇の林の中へ見つからないように隠してから、入り口付近に罠がないことを確認してから洞窟の奥へと忍び込んでいった。

洞窟の奥から生暖かい風が吹いてくると対照的に、壁を良く見ると乾燥していることからあまり中が深くないか、もしくはかなり長い時間人が使っているのではないかと推測しながら一歩一歩慎重に進んでいくと、洞窟の先で煌々と明かりが焚かれているのが目に入ったため一旦岩陰に潜み、モイラが先行して様子の確認と潜入している仲間とコンタクトが取れるか確認に向かった。

あたしは壁に背を付けてすぐ動けるように片膝を立てつつ腰を下ろすと、皮袋から水筒を取り出し水で口を湿らせた。

思っていた以上に先程目にした人の死に様が、血の赤さが目から離れず、さつきから胃から込み上げるものが止められない。

自分の心を守る為にもはつきり言って人は殺したくはない。でも、大切なものを守る為に必要ならば人を殺めなければならぬ。

ここに来る前に覚悟を決めてきたつもりだったのに、実際にその現場に居合わせるとこんなにも気持ちが揺らいでしまっている。

ずっと震えが止まらない手をもう片方の手でグツと押さえつけ、なんとか気持ちを立て直そうとあたしは目を瞑り丹田の氣を意識した。

こんなことで動揺しましたなんて、甘ちよいこと言ってられない。こうしているあたしより、捕らえられているシエハラザードや子供達の方がもっともつと恐怖を感じているんだから。だから、あたしはこんな事では動じちゃいけないんだ。

と、突然グシャグシャと乱暴に頭を掻き回されることで、あたしは思考の深みから抜け出し隣にいるロイをびくりして見つめた。彼はずっとモイラが先行している方向に意識を向けて何事も洩らさぬよう様子を伺っていたが、ただその手だけは意識しているのか無意識の行動なのかわからないが、あたしの頭を乱雑に掻き回し続けていた。

その彼の様子にちょっと啞然としていたが、ふと、自分の心のかかっていた重石がいつの間にか取れていたのに気がつく。やっぱり子供扱いされるのは癪に障るが、でもそんな扱いをしてくれる彼に少し感謝してしまったのだった。

「閣下、クリューガー准尉と連絡が取れました。」

それから2分ぐらい経ってからモイラは戻ってきて、これから先の状況と連絡が取れたという仲間からの情報を地面に絵を書きながら説明をし始めた。

「これから50mほど先に直径80m程の円状の大きな空間が広がっています。この空間と洞窟が繋がっている向きから反対側に合計4つ部屋が作られていて、左から監禁部屋、休憩室、倉庫、そして使用用途不明な部屋となっています。今残っている人員は12人。うち2人は監禁部屋内におり、4名は外で見張りをし、そして残りの6名は休憩室にいます。見張りの4名は2名ずつ分かれ、それぞれ監禁部屋と用途不明な部屋の前に居ますが気になる点が1つあります。この用途不明な部屋にはごく限られたものしか入室を許可されない事から、ここに主犯が居ることは間違いないかと。ただ・・・」

そこでモイラは一度言葉を切ると顔を少し強張らせながら気になる情報があると繋げた。

「准尉がいうには、その部屋の中から妙な魔力の波動を感じるそうです。今までに感じた事の無い種類の。用心に越したことはないかと・・・」

モイラが説明した内容をもう一度皆で認識しあい、改めてお互いの役割を確認する。

本来なら全員で一気に強襲をかけるところであったが、不安要素があるので念のために【再生】ができるロイの部下2人をこのまま潜伏させて助け出した子供達と合流したら真っ先に街へ帰るよう指示を出すと、あたし達はゆっくりと奥へ進んでいった。

その空間は天井に大きな孔が穿たれていて、大地の中から見える降り注ぐような星空があたしの目を魅了した。こんな状況でなければ

ば思わず見蕩れてしまうこの光景を見ながら本当に残念に感じていた。

『もし、この場所が向こうの世界にあつたら、間違いなくデイトスポットかパワースポット扱いでカップルがわんさか来るんだろうな・』

ふとそんなことを考えながらも、あたしは神経を研ぎ澄まし辺りの氣の流れを確認する。

事前に説明されたとおり、先ず目視にて4人見張りを確認。木で作られた部屋が4室ありその一番左から鈴の音が聞こえてくる。そして鈴の音の近くに氣の固まりが6つ。その近くにそれよりも大きい氣が2つ。その隣の部屋には確かに6つの氣がある。そして、問題の諸悪の根源が居ると思われる部屋

あたしはその氣を探るとそのおぞましさに思わず顔が青くなった。なんだ?!この見てはいけない物を見たような、心臓を直接捕まれたような恐怖は・・・?そして、そのおぞましい氣はその隣にある倉庫からも感じるのだ。

脳内に激しい警報が鳴り響く。これに不用意に近寄ったら死ぬ。

あたしは緊張でカラカラになった唇を何度も舐め、ロイの肩をしつかりと掴む。その様子に顔を向けた二人に対し、

「二人とも、あの右2つの部屋には行かない方が良い・・・いや、入っては駄目だ。何でかは説明出来ないけど、あの部屋は相当ヤバイ物がある。」

「それは、お前の例の勘か・・・?」

「それがどのことを言っているのか分からないけど、理屈じゃなく感じるんだ。頼む、俺を信じてくれ。」

二人ともじつとあたしの目を見ていたが、ふとモイラは息を吐くと「これが、閣下が言っていた“良く助けられた勘”ですか。何でも的中率が異常に高いとか。」それを聞いていたロイが大きく頷く。「ああ・・・、特にこいつが“止めておけ”と言った事はまず外れたことが無い・・・わかった。今回は子供の奪還をしたら一旦撤退しよう。」

それを聞いて、心から安堵するとあたしは改めてシェハラザードが捕らわれている部屋に注意を向けるのであった。

1章・10 ファマガスタの長い1日 ? (前書き)

今回は一部R15に掛かる部分があります。苦手な方はスルーしてくださいませ。

1章 - 10 ファマグスタの長い1日？

さつきからずつと髪の毛が逆立ち、神経がチリチリ焼け付くような感覚があたしを支配していた。

いよいよシエハラザード達を助け出すというときに、あたしは異様な恐怖を感じ続けていた。

この恐怖をもし例えるならば、悪乗りして心霊スポットに行ってみたら場の空気が異常におかしいと感じた感覚に近いというか、そういう場所って目に見えなくとも全身が拒絶することってあると思う。『良く分からないけれど、ここから先に進んだら本当に大変なことになる』と思う原始的かつ根源的な恐怖。

この時、あたしは正にそれを感じ取っていた。

怖気づく脚に力を込めて、目は逐一見張りの様子を観察していたが、あたしの意識は常に恐怖に向き続けていた。

そして、クリューガーとコンタクト取れたとモイラが合図を送り、表にいた見張りのうち監禁部屋に居たほうの人間が隣にいたもう一人に話しかけた。そのことで、一瞬外の見張り全員の注意が話しかけた彼に向いた

瞬間、事は動いた。

モイラが【風脚】で音を封印したと同時に、話しかけていた見張りの一人・・・クリューガーが相対する見張りの頸動脈を押さえ付け意識を奪う。その時あたしはもう一組の見張りの前まで高速で移動し、一人は鳩尾に一撃、もう一人はこちらを向こうとしたタイミングを見て脳髓に手刀を叩き込み気絶させた。その時にはロイとモイラはクリューガーと合流し中の様子を伺った後、一気に突入し中に居る二人の行動の自由を奪っていた。

この間、僅か2分足らず。はつきり言っただけであたしが気絶させた二人を縛り付ける方が時間が掛かったくらいだ。

彼らの息の合った動きに感嘆しつつ、あたしは縛った二人を部屋の入り口から見えないところに転がすと監禁部屋に一目散に駆けつけた。開放された子供達と共に、丁度猿轡を外され縄を解かれたシエハラザードの姿があり、あたしの姿を見つけると途端に顔をクシヤリと歪めると勢い良く抱きついてきた。

「アレク様！！　ごめんなさい・・・心配かけて本当にごめんなさい　！！」

「うん・・・うん・・・良かった・・・ほんと無事で良かったよ・・・」あたしは安堵の余り力いっぱい抱きしめる。そして彼女の身体を確認し外傷が特に見当たらないのを確認すると気力が一瞬途切れ、シエハラザードを抱き締めたまま地面に蹲ってしまった。

「アレク様？アレク様！！大丈夫ですか！？どこかお怪我でもされましたか！？」

安心の余り気が抜けてしまったあたしに、そうとは知らぬシエハラザードは泣きそうになりながらあたしの身体を触って具合を確認していたが、ふと隣で苦笑している3人の中からロイの姿を見つけると元氣良く噛み付いていった。

「ロイ！！あなたという人はもしかしてアレク様のお優しい気持ちに付け込んでご無理させたのですかー！！其処になおらない！！あたしが成敗して　モガモガ」

「シエラ、シエラ。元氣があるのは良いけれど、そこまでにしとこないねー」

あたしは急いでシエハラザードの口を塞ぐ。ああ・・・苦笑いしているロイの後ろに般若の顔をしているモイラの姿が目に入る・・・っってお願いですからその手に持っている剣を仕舞って下さい！で、そのクリューガー！！お前面白がってないで見ているな、何とかしろ！！

そんなあたしの心の声が聞こえたのか「まあまあ・・・」とクリューガーが割って入ってくる。

「ま、感動の再会も済んだことだし、そろそろ気付かれる前にこの子達を安全な所に移動しますか。」

彼のごく真つ当な提案にあたし達はすぐさま顔を引き締め、シェハラザードは申し訳なさそうに頂垂れた。

「ま、お嬢ちゃんも皆を励ましていたりと色々頑張っていたからな見知った顔ぶれに囲まれて気が緩んだんだろ？」そういつて、「なっ？」とシェハラザードの顔を覗き込みながらモイラにもちゃんとどんな状況だったのか間接的に伝えていた。

あたしはその彼らの様子を一応感づかれていないか辺りの気配を探りながら聞いていたが、シェハラザードのことを始めとして、彼らをしっかりと見守っていてくれた人がすぐ傍に居てくれた事に心から感謝したのだった。

そして取り合えず今のところ変化は見受けられないのにホッとしつつも、相変わらず感じ続ける嫌な気配を振り払うかのように子供達には笑顔を向け撤退行動を開始した。

まず先行をモイラとクリューガーが務め、中心を子供達と一緒にシェハラザードが付き、殿をロイとあたしが守る形で慎重に部屋を出て小走りで広間を駆け抜ける。

あと、洞窟まで20m・・・10m・・・、見張りを攻撃したときはあんなに一瞬であった距離が余りにも今は遠い。

もうちよつとで洞窟の入り口に到達する。物陰に隠れているロイの部下の人達の姿も身を乗り出してこちらが皆無事であることを確認する姿が見え、それを見た子供達の足が更に速くなった。漸く洞窟に入ろうとしたとき突然、

恐怖が大きく膨張し、全身の毛穴が開き、毛という毛が全て逆立ったような感覚に支配された。

その後起こったことは、全ては一瞬の間の出来事だった。

ロイが【紅焰】で光の槍を生み出すと恐怖に向かって勢い良く打ち出し、

モイラが【風脚】で子供達を包み込むと風に乗せた勢いそのまま洞窟の方に思い切り押し出す。

クリューガーが魔道陣を発動させ、大地から水の盾を生み出すと全員を守るようにドーム状に包み込み、

あたしは考えるよりも先に身体が咄嗟に腰のロングソードを全身のバネを使って空間に開く空に向けて投げつけていた。

次の瞬間世界は禍々しい青い光に包まれ、空に放った剣に青い光が落ちた途端、耳を劈く様な轟音と強烈な衝撃波があたし達に襲い掛かる。

ロイの光の槍は青い光と衝突し相殺され、クリューガーの水盾は何とか皆を護りきったが、一瞬にして全て蒸発した。それでもなお衝撃波は収まらず、あたし達は3mほど飛ばされ激しく壁に叩きつけられてしまう。

「・・・グッ」

「ガハッ!!」

「ガホッ!・・・ゲホ　　!!」

「　　ッ!!」

それぞれ全身に走る激痛の為、必死で意識を保とうとするなか、やけに場違いで静かな声が耳を打った。

「・・・やれやれ、何か騒がしいと思ったら、大事な供物を儼から奪おうとするとは・・・」

朦朧とする意識を必死に振り払い四肢に力を込めて立ち上がると、霞む目を凝らして恐怖の正体を声の主を睨み付ける。

彼は 見たところ70代ぐらいの老人であろうか。髪は真っ白で背も曲がり、肌もその艶を失った弱弱しい只の老人・・・恐怖の元は間違いなくこの老人であるが、この人間からは恐怖するほどの威圧感を感じない。いや、確かに狂気を孕んだ瞳は恐れるに値するがそれだけではこの心臓が掴まれたような恐怖は受けないのだ。だが、それにも拘らずあの禍々しい力。そのギャップにあたしは心から震えが来るのを感じる。

老人は一步一步とあたし達の方に近づきながらもふと視線をあたしに向けて話しかけてきた。

「あの剣を投げたのはお前か・・・？偶然か？それとも
更に一歩踏み出す老人を睨み付けながら、腰を落としていつでも飛び出せるよう構えを取る。」

次にあの光の直撃を食らったら たぶん助からない。今ここに居る4人の中で初動は間違いなくあたしが一番早い、ならば・・・
その時、一歩踏み出したあたしを遮る形でロイが老人の前に立ち塞がった。彼は今までに無い険しい表情で老人を見つめると怒りを堪えるような抑えた声を出すと老人に話しかけた。

「・・・ネストル・ダヴィドフ 魔法を封じられたお前が何故使える？いや、今回の事件の首魁はお前か・・・また研究と称して子供達の命を弄ぼうとしていたのか！！」

ロイの怒りに呼応して構えた刀が紅蓮の炎を纏う。そして、モイラやクリューガーも一応に怒りを滲ませそれぞれネストルと相対す

る。その様を全く動じず見ていたネストルは高く嗤笑すると、実にくだらないことをいうと言いながら、ロイを一瞥すると更に一步近寄ってきた。

「小僧……どこかで見たことがあると思っていたが、あの時のカルヴァートの息子か……ならば何時ぞやの礼も兼ねてやらねばならぬの……」

嘗て、天才と呼ばれた魔法使いがリヴォーネ国には存在していた。彼は常人の12倍とも云われた圧倒的な魔力とその魔法の独創性から500年に一人の傑物ともアマデウス神に愛されし者とも呼ばれ、動乱期のリヴォーネ国を支えた英雄の一人であった。彼が戦場に立つと云われただけで敵軍は恐慌に陥り、戦わずとも勝利する事も度々あったほどであり、そんな彼の元には沢山の有力者がその助力を求め列を成し、必然的に沢山の富が名声が集まっていた。

だが、そんな彼にも時は平等に訪れる。

少しずつ、手の中から砂が零れ落ちるように魔力は衰え、代わりに若い力が育ち始める。彼の生み出した魔法を基として新たな魔法が生れ落ちたが、その現象を彼は理解することが出来なかった。為しう事が出来なかった。

この国を支えてきたというプライドと、徐々に奪われていく自分の立場。必死で足掻いても時は無常に魔力を奪っていく。血を吐くような修行をしても、数多の知識を学んでも、全盛期の自分とは程遠い状況に焦りばかりが募っていた。

そして彼は、魔力を取り戻す方法を探していく裡に、ついにある方法に辿り着く。

自分の魔力が失われていくだけならば、失われた魔力の代わりになるような兵器を創ればいい。

そう、彼はやはり天才だったのだ。

それから、新たな魔道陣の構築に全ての時間を費やしていった。彼は魔晶石の持つ魔力を収束する性質に着目し研究を続けた結果、魔晶石は魔力を帯びるとある一定方向へ強制的に魔力を放出する特性を持つことがわかった。

そして彼は放出された魔力を効率良く利用する為にどんな属性が相応しいか更に研究した結果、光エネルギーが最も効率がいいという結論に達する。彼は国内で唯一光を操ることの出来る魔道陣を持つカルヴァート家へ出向き協力を要請した。軍事目的での【紅焰】の使用を厳しく制限しているカルヴァート家に対し・・・光エネルギーと植物の成長の因果関係を調べ、ひいては食糧生産の向上を図る為といった。

こうして【紅焰】を借り受けた彼は早速魔道陣の解明に着手し、強烈な光と熱エネルギーのみを打ち出すことの出来る新たな魔道陣を開発、魔晶石をそれに埋め込むと装置に組み入れた。

こうして、ついにリヴォーネ国に初めて魔道兵器が誕生したが、一つどうしても解決しなければならぬ難題が生じていた。

それは兵器にとって肝心な魔力の供給である。実験中は小型のものを使用していたため、魔力の素は小型のモンスターで足りていたが、実際に兵器として役に立つレベルとするとそれでは全く足りない。何よりも魔力の質が悪くて魔晶石への負担が余りにも掛かり過ぎてしまうため、モンスターの魔力だと数回の使用で魔晶石が破砕してしまうのだ。

では、より純度が高く、高質な魔力は何処にある？彼は更に様々な文献を、実験を重ねついに答えに辿り着く。

その頃、ファマガスタでは人攫いが横行していた。老若男女問わず突然に姿を消すという事件であったが、段々とその対象が12歳以下の子供ばかりになっていった。そして、それと同じくしてある噂がまことしやかに街に拡がり始める。

子供達は街外れにある宮廷魔術師の館に連れて行かれたよ・

・・・

ある日、彼の館を二人の人物が訪れた。かつて彼に【紅焰】を貸したカルヴァート伯とその息子であるロイ少年である。彼らは正統なる【紅焰】の継承者という立場という事を利用し、一連の噂に対し弁明するようにとの度重なる国王からの召還命令を無視し続ける彼の様子を探るよう命を受け、ここを訪れたのであった。二人を招き入れた彼は、終始浮かれた様子で対応し続けた。その姿が今までカルヴァート伯が見知っていた彼の姿と余りにも違うため、伯は胸騒ぎを覚えながらも此処に訪れた理由の一つを口にした。

「何かとても良いことでもございましたか？ダヴィドフ卿。もしかしましたら、以前【紅焰】をお貸ししたときにお話されました利用法にでも目処が付きましたか？」

それを聞いた彼の眼が一層うれしそうに妖しく輝いた。それを見た二人に言いようの無い恐怖が湧き上がる。

「ああ！！その節は本当に感謝してもしきれぬぞ、カルヴァート伯。貴公のお陰で儂の研究が完成したようなものだ！！そうじゃ、まだ成果を見せてはいなかったな、貴公達には見る権利があるからご案内するでしょう！」

そう言つて、彼は二人を館の最上階へ案内した。その途中でカルヴァート伯に「これはお返ししよう。」と【紅焰】を手渡した。

最上階は燦々と太陽の光が降り注ぎとても明るい空間であつたが、それとは対照的に異様な寒さに支配されていた。

彼は廊下を進みある一室の前に二人を導くと、勢い良く扉を開け放つと二人を中に招き入れた。

真っ白な部屋の中には、中央に横に置いた円錐形のような銀色に輝く物が一つポツンと置かれていた。大きさは大体大人が3人ほど手を繋いだ位あるだろうか。その先端には大きな魔晶石が嵌められており、魔晶石の周りに何重もの魔道陣が刻み込まれ、先端は窓絡

みえるシャルナ湖に向けられていた。

・・・そう、それだけなのに何か違和感がある。見てはいけなものを見たような・・・

そこまでロイ少年は考え、もう一度見直すことで自分があえて見ないようにしていた物が何であるか理解し、理解した途端堪えきれずに何度も何度も嘔吐を繰り返した。

ロイ少年が見たもの、それは無数の同年代の少年少女の死体である。彼らの身体には全く傷一つない綺麗な状態で、まるで命を吸い取られたような姿のまま、円錐形の物の奥に隠れるようにうず高く折り重なっていた。カルヴァート伯は全身から血の気が引くのを感じながら用心深く口を開く。

「ダヴィドフ卿・・・これは一体　　その亡骸は街で居なくなつた子供達ですね・・・あなたは研究と称して何をしていたのですか！」

「ああ、まだちゃんと説明していなかったな。僕の研究とは自分以外の魔力を使って強大な魔法を行使することだ！ほら、これがその成果じゃー！」彼はそういつて銀の箱を指し示す。

「貴公から借りた【紅焰】を解析し強烈な熱光線を生み出す魔道陣・・・そうじゃな仮に魔動機とでもしよう・・・それを造り出す事が出来たのだが、肝心な魔力がなかなか手に入らなくて困った・・・だがそれも解決済みだ。実験の結果、どの年代が一番良い魔力を持つかが判明もした。これを陛下にお見せすればきつと戦力的に御満足して頂けることであらう！そして分かっていただけのはずですよ、誰が一番優れた魔術師であるかという事を！！誰がこの国に必要なということを！！」

彼はそう言つて狂気に歪んだ目を二人に向ける。

「ここに丁度良く魔動機のエネルギーもあるしの、試し撃ちでもしてどれだけこの兵器が有効なのか知っていたかどうか。幸いにも御子息は魔動機と一番相性の良い炎系の魔力をもっている。きつと素晴らしい結果を出せるだろう！」

狂気の表情を浮かべ近寄るダヴィドフに対しカルヴァート伯は息子の前に立ち塞がると素早く手首に【紅焰】を装着するとダヴィドフが魔法を行使しようとして手を伸ばした位の位置に高熱の塊を配置する。そしてそれは狙い通りに彼の右の掌を捉え、辺り一面肉の焼ける厭な臭いが充満した。

「ぎゃあああああああ！！！！」

絶叫を上げ腕を押さえ蹲る彼のもう片方の掌を容赦なく焼き、両掌の感覚を完全に潰すことで魔法を使えなくしてから、カルヴァート伯は彼を縛り自由を完全に奪うと、強烈なショックを受けてしまった息子を連れ王城へと参内し、そこで見聞きしたことを全て王に報告したのであった。

そして、かつての偉大な英雄は地に落ちた。

それまでの彼のリヴォーネ国に対する多大な功績に考慮して命だけは助けられたが、彼にとっては死にも勝る屈辱を・・・魔力を封印するという特殊な魔道陣が両手に直接埋め込まれることで完全に魔法を封じられてから、文字通り身一つで放逐された。

この世界で魔力を使えないことはその存在を完全に否定される事と同意味であり、生活する術を持たない事を意味する。

彼の存在はやがて忘れられ、歴史上稀に見る凶悪な兵器は城の奥に完全に封じられることで、歴史に登場することなく表舞台から姿を消したのであった。

「貴様の父親によって魔法を封じられリヴォーネを追放されたがの・・・そのお陰で僕は神に会うことができたのだ！」

一言一言紡ぐごとに、ダヴィドフの顔に狂気の色合いが濃くなり、それと共に邪悪な魔力の波動もどんどん高まっていく。

「神はこう仰った。『お前のような優れた者にふさわしい力を新た

に与えよう』と。『その力を使い、お前を認めようとしなかった愚かな者共にお前の偉大さを思い知らせてやればよい』と！」

そう言うとダヴィドフは15センチぐらいの長さのある棒を持ち右手を天に掲げた。あたしははつきりと先程からの恐怖の正体が其れであると感じ、必死になってそれが何であるか知ろうとした。

何だろう・・・先端が縦に線を刻んだ円錐形で一番下に不気味な青く光る丸い石が付いている。そしてグリップの部分が・・・どこかで見たことがある・・・？見覚えのある形状に言いようのない恐怖を感じる。何故？あたしは何処でこんなものを見ていたんだ？！

なかなか出てこない記憶に焦燥が募る。だが、あたしの疑問は次の瞬間最悪の形で解決した。

「神に選ばれ者を認めようとしないう民達よ、今こそ、その身に直接神の力を受け取るがいい【ヴァジュラ】を。」

1章 11 ファマグスタの長い1日？

ダヴィドフが握っている棒に付いている珠へ宿る青い光が益々その邪悪な輝きを増すなか、あたしは彼が言った“ヴァジュラ”という一言で一連の思考の霞が晴れ渡るのを感じていた。

あの、グリップの部分・・・どおりで見たことがあるはずだ。あれは家の近所のお寺に置いてあった金剛杵の一種類である 宝珠杵とほぼ同じような形態をしている。

そして、ヴァジュラは確か金剛杵の形をした神具で神の武器とされていた。この神具を使い、悪魔や阿修羅とも戦った武勇の神として有名なのは 雷神インドラ、日本名、帝釈天。・・・！！

そこまで思い出したあたしは全身の血の気が引くのを感じたが、顔を上げると3人に聞こえるようにと限界まで声を振り絞った。

「みんな ああの武器の能力は雷だ！！」

それを聞いて、皆一瞬恐怖に顔を歪めるが、直ぐに気を取り直すとそれぞれ魔道陣を発動し全員を包み込めるようなシールドを展開する。

展開が完了したとほぼ同時のタイミングで視界を青い光が埋め尽くしたと思った途端に轟音が轟き、防ぎきれなかった衝撃が断続的に全身を押しつぶしてきた。

何とか第1撃を防ぎきったと思っても一向に攻撃の手は止まず、稲妻は断続的に4人を襲い掛かり続ける。

「クソッ！！こんなに強力な魔法使い続けたら命が幾らあっても足りねーぞ！！なんであいつ無事でいられるんだ？！」

衝撃による苦痛と徐々に削られていく魔力という名の生命力にク

リユーガーが堪らず悲痛な声を上げる。見ると声を上げないよう歯を食いしばって堪えているが、モイラの顔も真っ青になり刻一刻と血の気が失われていた。

「なかなか粘るのう・・・」ダヴィドフの厭な声がこんな轟音の中耳に響く。奴はその瞳をあたしに向けると更に言葉を続けた。

「先程の剣を咄嗟に投げた事といい、今のヴァジュラの能力を見破ったことといい・・・お前は何者だ？正直に答えるのであれば、あの隠れている供物共々我が神に捧げてやろう。小僧のような毛色の変わったものも我が神の好まれる物だしの。」

その言葉にあたしはギョツと眼を剥く。だが、それよりも傍から異常な氣を感じて隣を見るとロイが完全にキレてしまったのか顔つきがかなり凶悪に変化し、それに身に纏う炎のオーラが赤を通り越し蒼に変化していた。

そのキレっぷりにびっくりしていると、モイラとクリユーガーが呆れ顔で

「・・・あーあー、やつこさん完全に御大の逆鱗に触れちゃったな・・・」

「ほんとにね　　眼に入れても痛くないってぐらい可愛がってた弟分でしょ？彼。昔から彼の件で何か悪い事言われると手が付けられなかったものね・・・溺愛もここまでくると正直鬱陶しいわよね・・・」とふかーく溜息をついていた。

あ、あのね、今結構シリアスな場面だと思うんだけど、何でそんなにリラックスしちゃったのかな？

思いつき戸惑っているあたしに笑いかけると二人は、「まあ見ていなよ」とロイのほうを指し示した。

ロイの魔力の変化に合わせて、シールドの一番外側を覆っていた

光のシールドも一部がその形を変えていく。それはまるで小さな太陽のように変化すると眩いばかりに紅く光り輝き、そしてダヴィドフ目掛けて無数の光の矢を打ち放った。

光の矢はあたし達を襲っていた稲妻を打ち砕くとダヴィドフにそのままの勢いで襲い掛かった。すると堪らず奴は稲妻を防御形態に変え自分の周りをプラズマで覆い尽くす。

「あれが、【紅焰】の最高形態、【プロメーテウスの矢】だ。炎系統の魔法の中では最高ランクの一つなんだが・・・」

「あの魔法ですら互角だなんて・・・閣下の魔力の残量からして持つてあと3分　それまでに打開策を見つけないければ・・・」

そう言って二人は顔を強張らせる。確かに、ダヴィドフを見ると魔法は拮抗しているが全然堪えた様子は見えない。それに対しロイは一秒毎に額に滲む冷や汗が増え、隠し切れない苦痛の表情が見て取れた。

正直、今この3人の内一人でも魔力が尽きてしまえばそれはここに居る全員の全滅を意味する。3人の持つ能力の絶妙なバランスによってあたし達は強力な稲妻からのダメージを必死に交わしている状態だ。ならば・・・

あたしは顔を上げ3人を見渡すと、はっきりとした口調で進言した。

「ロイ、すまないが一瞬でいい。強力な光で奴の視力を奪うことは出来ないか？」

「・・・ああ、それぐらいならいけるが　お前、何を考えている？」

先程の凶悪な表情を浮かべながら、ロイは射るような視線をあたしに向けて問いかけてくる。多分反対されるんだろうなーと思いいながらも、躊躇い無く口を開いた。

「その隙を見て俺が直接ヴァジユラを攻撃する。おいおい、3人共言いたいことは分かるが考えてもみる。今この状態で誰の手が空いている？それに俺より早く奴に辿り着ける人間は此処に居るのか？第一考えても見る、あんだ達一人でも居なくなったら襲ってくるかもしれない稲妻からあの隠れている子供達を誰が守りぬく？」

ぐつと詰まる彼らを改めてゆっくりと見渡しながら、一言一言意志を込めてあたしは訴えた。

「俺のことは大丈夫だ。俺の魔力は全部身体強化に組み替えてあるからこの中で一番丈夫だし、【再生】力が高まるよう陣を組み込んである。俺が攻撃するのが一番成功率が高いからやるんだ。」

「解った・・・」

ロイはグツと奥歯を噛み締めると唸るように言葉を搾り出した。確かに個人の持つ戦闘能力や現在置かれている状況を考えるとアレクシスが攻撃し、残り3人が防御に廻るしか方法はない。判つてはいるが一番危険な行為を自分の弟とも思っている者に、いや何より事件に巻き込まれただけの民間人にさせるという事に自分の無力さを厭というほど思い知らされる。だが、そういった焦燥を胸の奥に押し込めるとロイはアレクシスを見つめた。

あたしはそんなロイに苦笑しつつも、なるべく心配掛けないように笑いかける。

「そんな顔するなよ、ロイ。大丈夫だって、俺悪運だけは強いからな。調子に乗っている奴に一撃かましてくるよ。」

覚悟が伝わったのか、ロイは一言「頼む」とだけ言うた。ダヴィドフに一層の注意を向け目くらましのタイミングを計り始め、それを確認したあたしは3人の居る場所からゆっくりと離れると右手に自分の氣を集めるイメージを浮かべた。

・・・大丈夫、アレクと一緒にになったばかりの時、まだ身体に漲る力の調整が利かなかった時には出来ていたこと・・・

ふつと丹田に氣が満ちるのを感じたとき、ロイが放った閃光が世界を真っ白に染め上げた。

「うおおおお？！何じゃ！！見えん！！」

ダヴィドフが眼を庇い一瞬雷撃が止む期を違わず右手を力一杯地面に打ちこみ大地を打ち砕くと、その大きな地面を両手で掴み上げ全身の力を込めてダヴィドフに投げつけ、あたしはその投げた地面の陰になるように勢いよく飛び出すと、氣を練り上げつつ奴に向かつていった。

途中で異変に気付いたダヴィドフは直ぐにヴァジュラを発動させるが、よりスピードの速い岩石の方に雷は落ちてゆく。その間を縫うようにしてあたしは距離と詰めると奴の持つヴァジュラに狙いを定めて拳を振り下ろした。

『あの稲妻と同じ氣の色をしたあの珠を砕けば確実に魔法を封じれる・・・！！』

そのあたしの姿を見たダヴィドフが焦りと恐怖の色を浮かべる。それを見て自分の考えが確信に変わり、身体的全氣と体重を乗つけた拳をぶつけた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6603m/>

十六次元のどこかで

2010年10月21日04時36分発行